

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 9 9 号

東洋のマイアミビーチとして発展した

「湘南海岸公園の歩み」 内藤 喜嗣 ... 1

劉生研究

「村娘之図」（花持てる） 有田 裕一・佐藤 和子 ... 6

史跡めぐり

「鵠沼の相模国準四国八十八か所を訪ねて」 ... 小池 清志 ... 14

「鵠沼の白い橋」鵠沼を画題にした画家たち 岡田 哲明 ... 16

エッセー「くげぬま断章」（Ⅱ） 山上 英男 ... 27

今井達夫遺稿 ⑤ 「指の輪」 今井 達夫 ... 30

「鵠沼を語る会」活動の記録（平成21年4月～9月）総務担当 ... 67

編集後記 70

『新編相模風土記稿』（天保13年、1892）に、「鵠沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

「東洋のマイアミビーチ」として発展した

湘南海岸公園の歩み

内藤 喜嗣（会員）

明治初期まで無人の砂丘地帯だった鵠沼海岸の開発は、1887（明治 20）年の鉄道開通が切っ掛けで始まりました。鉄道開通の前年、大磯・鎌倉に次いで鵠沼海水浴場が開かれ、海辺に「鵠沼館」「対江館」「東屋」の三軒の旅館が設けられました。

その奥に広がっていた広大な砂原に道路が敷設され、クロマツが植えられて、日本初の別荘分譲地が開発されました。江ノ電が開通する 1902（明治 35）年頃から別荘地は人気を呼び、海水浴は、汐湯治から行楽レジャーに変身、板子の波乗りも始まり、夏のシーズンには都会から多くの人々が訪れ始めました。

そんな折の 1923（大正 12）年初秋 9 月 1 日に大震災が発生、地域の家屋は殆ど全半壊しました。しかし、幸いにも避暑、来遊客の大半はシーズン終了で帰京して滞在者が少なかったことで、圧死者 50 人が出ましたが、火災は一軒で、復興は短期で果たされ、京浜の被災地から別荘地に定住する人が増えました。

大地震による地盤の隆起（90cm）は砂浜の拡大をもたらし、砂防対策が求められ、神奈川県は昭和天皇の御大典記念の一環事業として湘南海岸一帯にクロマツを植林しました。

1929（昭和 4）年の小田急江ノ島線の開通は海水浴を身近な日帰りの行楽として大衆への普及をもたらしました。また、京浜への通勤者の住宅地の開発が始まりました。

そして当時、県知事に就任した山県治郎は、湘南海岸の国際的な観光地としての開発を目論みました。手始めに「湘南遊歩道」（府県道片瀬一大磯線）の敷設を開始し、「藤澤都市計画湘南海岸公園」を策定し、引地川河口の切り替え整備などを推進しました。藤澤町（1940（昭和 15）年に市制）も対応して鉄道省の「海の家」や県営（後に町営）プールの誘致・開設、本格的な町営「鵠沼海水浴場」建設を行いました。かくして関東を代表する海水浴場として知られるようになり、行楽客で賑わいました。

しかし、1941（昭和 16）年に太平洋戦争が勃発して、砂防事務所の閉鎖から

クロマツの盗伐・塩害での枯れ死・飛砂で湘南海岸公園は荒廃し、湘南遊歩道も砂で埋もれ通行不能となりました。

1945（昭和 20）年 8 月 15 日に戦争は終り、12 月には進駐軍はブルドーザーやダンプカーを大量に使って埋め尽くした砂を撤去し、道路を復興し、神奈川県に砂防事務所の復活設置を促し、クロマツの植樹と東に蛇行した引地川河口の整備を命じました。

一方、藤沢市は申し入れにより鎌倉郡片瀬町を 1947（昭和 22）年 4 月 1 日、編入合併しました。これにより藤沢市は神奈川県と江の島・片瀬・鵠沼海岸の観光地を一括管轄することになりました。

海水浴場は従前通り 1947（昭和 22）年 7 月に復興、鵠沼海岸は鵠沼銀座商店街「鵠栄会」の運営で 1953（昭和 28）年 8 月末まで「鵠沼海岸海水浴場」として、片瀬は東浜海岸で「片瀬海岸海水浴場」として開かれていました。そして 1950（昭和 25）年からは新たに片瀬川河口周辺で西浜海水浴場を開設しました。

この間、1947（昭和 22）年 4 月頃から休日ともなると鵠沼海岸と西浜海岸の境に跨る平坦な海岸に進駐軍の将兵がジープで乗り入れ、海水浴・野外パーティ（バーベキュー・ハンバーカー・ホットドッグ・カンビール・コーラ・アイスクリームなど豊富な物資を持ち込んで）を盛んに行うようになりました。

彼等は日本に来て初めて海に入った者も多く、ワイキキ・マイアミなどを口にする者も多々いました。そしてここは監視所も無い非合法の海水浴場でしたが、彼等は GI ビーチと呼んでいました。

1952（昭和 27）年 4 月の講和条約発効を期に神奈川県と藤沢市は新たな湘南海岸公園の構築に着手しました。そして 1954（昭和 29）年 5 月 21 日、湘南海岸公園都市計画事業が決定、1960（昭和 35）年夏の完成を目指して事業計画が公開されました。

これは、本邦では初めての民間企業を活用しての特許事業方式をとり、民間企業が施設を建設し独自運営をする。県は護岸・道路・一部の駐車場・公園・憩いの広場の整備管理を行うというものでした。

これに、東急電鉄・小田急電鉄・江ノ島鎌倉観光（江ノ電）・日活・大安興業・浜野観光（オブザーバー）の六社が参加し施設建設が開始されました。

これより先、県と藤沢市は東浜にコーナーハウスを建設、江ノ電は県より西浜

に土地（乃木大将銅像公園跡周辺）の提供を受け駐車場の経営に乗り出し、日活は道路の北側に独自の土地で江ノ島水族館を、湘南海岸公園内に本邦初の鯨の保
養池マリナランドの建設を始めていました。

藤沢市は片瀬町との合併後積極的に観光事業に係りました。江ノ島の栈橋も
片瀬川河口の堆積砂洲の浚渫・東浦の埋め立てと併せ、橋脚、橋桁のコンクリー
ト化が図られ 1949（昭和 24）年 4 月竣工、「弁天橋」と命名しました。渡り初め
には美人コンテスト「ミス弁天」が行われました。また市は江ノ電と組み江ノ島
のサムエル・コッキング氏庭園跡を整備し植物園を開園、また東急の後援を得て
1951（昭和 26）年 3 月には民間灯台兼展望塔「読売平和塔」をオープンしてい
ます。

海岸の整備が進行した 1958（昭和 33）年度の観光事業計画でキャンペーンの
目玉として施設のキャッチフレーズが必要となり、当時、米国フロリダ半島屈指
の海滨リゾート地マイアミの映画や音楽（ザビエル・クガー作曲の「マイアミビ
ーチルンパ」）が流行していたこと、また、かつて米兵がこの浜をそう呼んでいた
ことなどから、ハワイの地名など他候補を押さえ票を得て決定したのが『東洋の
マイアミ』（当時の観光課課長談）でした。

藤沢市がマイアミ市と提携できないだろうかと希望を持つのはごく自然のこと
でした。この『東洋のマイアミ』の名について横浜にあったアメリカ文化教育セ
ンターの館長ウィリアム・F・デスマイヤー氏のアドバイスを得て、当時の金子
小一郎藤沢市長は 1958（昭和 33）年 2 月 21 日、フロリダ州マイアミ市長に姉
妹都市提携の申し入れの書簡を送りました。

マイアミ市長ロバート・キング・ハイ氏の返信は「マイアミ市はすでにラテン・
アメリカに対し、都市縁組の申し入れを済ましてしまったので納得して欲しい」
との断りの書簡でした。しかし、マイアミ市長が藤沢市の意向をアメリカ合衆国
広報文化局（USIS）に連絡してくれたようで、後記のようにマイアミビーチ市と
姉妹都市提携の切っ掛けとなりました。マイアミビーチ市はビスケーン湾を挟ん
でマイアミ市の丁度対岸にある都市です。

その年の観光事業は、海開きの神事の他に京浜地区に PR するキャンペーンイ
ベント『東洋のマイアミ・オープニングショー』を 7 月 19 日に当時最高のイベ
ントホール東京千代田区大手町の「産経ホール」をスポンサーに得ての開催から

始まりました。これが、藤沢市が全国に先駆けてフロリダ州マイアミビーチ市との姉妹都市提携へと進展することになります。

年が変わり、当の米国では国務省広報文化局から、この藤沢市の意図を聞き知った当時のマイアミビーチ市長ケネス・オカ（Keneth Oka）氏から、金子藤沢市長宛に、1959（昭和 34）年 2 月 26 日付け書簡が届きました。

オカ市長は書簡で「藤沢市は〔東洋のマイアミビーチ〕と呼ばれているので、このような都市とアイゼンハウアー大統領の主唱する〔国民対国民計画〕に従って都市提携を結ぶのは素晴らしいことだと思います。こちらでは次の議会で議決する用意があります。そちらの意向はいかがですか？」と提案してきました。

提案は 1959（昭和 34）年 3 月 5 日（この日を記念日としている）の市議会で満場一致で可決、国際電報で受諾の意向を伝達、ここに正式に姉妹都市提携が実現しました。

一方、マイアミビーチ市に於いても 3 月 4 日に市議会で満場一致の議決がなされていました。

そしてオカ市長の提案の 3 月 8 日にワシントン DC での国際フラワーショー会場における両市間姉妹都市提携承認伝達式に、当時ご自宅が片瀬にあった朝海浩一郎駐米大使に全権代表出席をお願いし、マイアミビーチ市長オカ氏との決議文の手交が行われ、その模様は VOA 放送で全世界に流されました。

これにより 1959（昭和 34）年度の観光事業は姉妹都市提携祝賀事業に切り替え、東急電鉄の後押しと当時開局したばかりのフジテレビと産経新聞の共催で祝賀式典・マイアミビーチ市に贈る催し「都市提携記念江ノ島マイアミビーチオープニングショー」から始まり、宣言式典・都市提携フェスティバル、都市提携祝賀大パレード、記念花火大会など盛大に進められ、交流事業のモデルとして児童交歓絵画展への出展・藤沢マイアミビーチジュニアオリンピック通信水泳大会（藤沢市の会場は 6 月に新設された湘南学園のプール）などが開催されました。

その後、江ノ島マイアミビーチオープニングショーは江ノ島が東京オリンピックのヨット競技会場になった 1964（昭和 39）年の特別記念の東京体育館での開催まで毎年フジテレビと共催して産経ホールで 7 月に開催されました。

交流の年度毎の記録は資料の保存が無く詳細は不明ですが交流は継続され、5 年毎の記念周年には行き来があったと聞きます。葉山 峻 市長は、15 周年の 1974（昭和 49）年 10 月に金井秘書課長を通訳・随員としてご夫妻で、山本捷雄市長

は40周年の1998（平成10）年10月に市議会議員・商工会議所会頭らと訪問しています。2000（平成12）年10月、「湘南マイアミビーチ市親善協会」が発足、交流事業の見直し、充実に向けて活発な活動が始まりました。翌2001年には訪問の旅を開催しています。

2003年7月、江ノ島サムエル・コッキング苑内マイアミビーチ広場に「鍵」モニュメントが除幕。同時期に45周年を記念して公式訪問団を迎えました。

藤沢市は2008（平成20）年度の観光事業は藤沢市マイアミビーチ市姉妹都市提携50周年記念を軸に江ノ島2008マイアミビーチショーが松沢神奈川県知事を迎えてのオープニングセレモニーから始まりました。11月には海老根靖典市長は公募した市民とマイアミビーチ市を訪問しました。

2009（平成21）年3月12～15日にマイアミビーチ市からマティ・ヘレラ・ブアウアー(Matti Herrera Bower)市長をはじめ公式訪問団が藤沢市を訪れ、14日には50周年記念式典・レセプションに臨まれました。

藤沢市はこの米国の海岸リゾート地、マイアミビーチ市との姉妹都市提携締結で内外に「東洋のマイアミビーチ」を売り込みました。特許事業社も積極的な展開を図りました。海水浴場も西浜と鵠沼を一体化した組合を作り、日赤の水上安全法救急員資格を持ったライフガードが雇われました。一方、米兵からサーフィンを手ほどきされた少年たちもいました。東京五輪のヨット競技が江の島で行われた1964（昭和39）年前後が海水浴場が最も賑わった時期でした。

しかし、この施設に重大な欠陥が指摘されました。なぎさプランと公園再整備、東海地震の予測値で相模湾の津波が7mと予想され、県は防災対策の優先から1990（平成2）年に「サーフ90」のイベントを機に公園の諸施設を全て撤去して、基盤を3mから7mにかさ上げる再整備に乗り出しました。そのセンターとして設置されたサーフビレッジは、その前のビーチバレーの常設コートと共に年間通してビーチスポーツのサービスステーションとなりました。

海外にも名を馳せた江ノ島水族館も新たな施設と企画で新江ノ島水族館としてオープンをし、片瀬川河口に片瀬漁港が竣工しました。江ノ島では新展望灯台に建て替えられ、植物園もサムエル・コッキング苑としてリニューアルされました。

湘南海岸公園「東洋のマイアミビーチ」は新しい時代のマリン・ビーチスポーツのメッカであり、憩いのリゾートエリアを目指して羽ばたいています。

（ないとう よしつぐ）

村娘之図（花持てる）

有田 裕一（会員）

佐藤 和子（会員）

岸田劉生は大正 6（1917）年 2 月 23 日、鶴沼へ肺尖カタルの療養のため転地した。そして劉生が鶴沼を去るのは 1923 年 9 月 18 日で、その時、劉生は 32 歳であった。

38 歳で若死した劉生の画業の中で特に「鶴沼時代」と呼ばれる 6 年余の歳月は、創作意欲の漲った、最も充実した作品を生み出した時期であったといわれる。

1917 年、鶴沼で最初に居を構えたのは佐藤別荘とよばれる二階建ての貸別荘であった。この佐藤別荘について、後年、麗子が著した『父・岸田劉生』雪華社刊（昭和 37 年 7 月発行）の中に「はじめの家は海に近くて広い敷地には松林があったりした。佐藤という人の別荘だったとみえ、土地の人たちはその家のことを佐藤別荘と呼んでいた。私は表門も玄関もまるで覚えていない。私が知っているのは、庭と縁側と便所と階段と、二階の下の小部屋と台所と、裏の宅地と別荘番の人が住んでいた小さな家と、松原と小径と小さな裏門とである。」と記している。

余談だが麗子は昭和 37 年 7 月この本の上梓直前、クモ膜下出血により 48 歳で急逝している。

また岩波書店刊『岸田劉生全集 第 8 巻』月報（6）に掲載された劉生の妻 秦^{しづる}の大正 6 年 3 月 2 日の日記には

——ここ鶴沼海岸へ移ったのは二月の二十三日であった。それ以来劉生さんは、寝椅子や又は布団の上で絶対安静療法をしている。（中略）

この家は南西の明るい見晴らしのよい家である。二階の縁に立てば西は富士山が麓までよく見えて続く連山の朝な朝なの景色はほんとに美しい。南は江の島がひと目に見えて海の上をゆくカモメの群れや空の模様で変わる波の色など、見る時々趣が変わって気がはげれする。

そうして、このうちは住み心地のよい家だけれども大方この家には六月までしか居ないだろう。それからはもう少し奥の松本別荘というのにそこが空いたら移る。そこには西洋館があるので。——と記されている。

この佐藤別荘について今まで多くの研究者が江ノ電鵜沼駅に近い佐藤芳藤園（鵜沼松が岡 2-1：武者小路実篤がかつて滞在したといわれる）であるとしている。しかし、数年前のこと私たち「鵜沼を語る会」のメンバーは、あの麗子とともに劉生の多くの作品に登場する村娘於松こと川戸（旧姓葉山）マツさんと一緒に現地検証をしたことがある。佐藤別荘のみならず松本別荘、おマツさんの家との位置関係は図の如くである。



佐藤別荘・松本別荘・おマツさんの家・佐藤芳藤園の位置関係

この図で見るとおマツさんの家と佐藤別荘は至近にあり劉生が借りたのは江ノ電に近い佐藤芳藤園ではなく、麗子のいう海に近い佐藤別荘と考えてよいと思う。

劉生の『初夏の麦畑と石垣』（1920年）には玉石を積んだ石垣と整地された開発地に2本の標柱が描かれているが、その1本には「佐藤所有地」との書き込みがある。今一本は判読不能、この辺りを調べれば何かが見えてくるのではないかと考えている。

おマツさんについては、先の麗子の文をまた引用すれば「佐藤別荘に越して間もなく、やがて村娘於松之像として沢山の父の絵のモデルになったお松ちゃんのお母さんが、台所の手伝いに来てくれた。お松ちゃんの家は佐藤別荘のすぐ近くだった。お母さんが家へご飯炊きに来る時お松ちゃんも一緒に来て私たちは友達になった。はじめてお松ちゃんと遊んだ日のことを今でもはっきり覚えている。お松ちゃんは私より三つ年長で六つだった。」とある。

また「父の体はめきめき元気になっていった。佐藤別荘は絵を描くには南向きで光線の具合が悪く、それにせまいので、鶴沼の中で手頃な家を探すことになった。そして鶴沼でたった1軒しかないという西洋館のついた家が見つかり6月にそこへ越すことになった。それが松本別荘だった。」と麗子は、母の日記とは少々違ったニュアンスの表現をしている。

いずれにしろ佐藤別荘には、たった4ヶ月の居住期間だったが麗子とおマツさんはよい遊び友達になりショウロを取ったりして楽しい時を過ごし、この関係は松本別荘に引き継がれていった。

この海に近い佐藤別荘の東側には三井物産の設立者で鈍翁の号で知られる益田孝の三男信世（初代小田原市長）の別荘があり、おマツさんの姉がこの益田邸のお嬢様（タカ子さん）のお付きの人としてお手伝いに行っていた。村娘之図や麗子像にしばしば登場する毛糸をざっくりと松編にした肩掛けは、その姉が益田家から貰ったものだそうである。

それを劉生がえらく気に入り麗子にも掛けたのだそうで、そのまま岸田家のものになったが、かわりに別の肩掛けをもらったとおマツさんは話された。

一方、麗子は毛糸の肩かけについて、ある画集（『世界名画全集 続巻 5 岸田劉生・小出楢重』平凡社刊 p67）の「リングを持てる麗子」の解説文に

肩に掛けている毛糸の肩掛けはお松ちゃんのものだったが、残り毛糸の様々な色で編んであるのがとても美しく、父はこの肩掛けと、私がモデルの褒美にサエグサ（洋品店）で買ってもらったばかりの肩掛けとを交換した。私はそれを承知

したもの一度もしなかった肩掛けがあきらめきれずに涙ぐみ、それを恥ずかしく思って隠したのを覚えている。——と記している。

劉生は、先に紹介した妻の日記の予想通り 6 月 24 日、松本陽松園（鶴沼松が岡 4-7-14）に移った。ここは現在の鶴沼海岸駅から湘南学園へ向かう道の左側にあたり、当時は、二本の大きな門柱があって門を入ると路地の両側に数軒の貸別荘が建てられていた。劉生が借りた家はその路地に入って右側の最初の家で、和風瓦の平屋の母屋に背の高い 2 階建ての洋館が併設されていた。洋館付き貸別荘は当時の鶴沼には他になかったという。洋館はアトリエとして使われた。

佐藤別荘では静物画、風景画など油絵は数点のみの制作であったのが、松本別荘へ移り、初めて専用のアトリエを手中にした劉生の創作意欲は病状の回復と相まって、ますます旺盛になっていった。

劉生は来鶴の翌（1918）年の 5 月には、かの有名な『麗子五歳之像』を描いた。

わが子がモデルを務められる年齢になるまで待ちに待っていたのである。その後、鶴沼での麗子像だけでも 60 点近くを制作している。劉生はこの絵の完成後すぐ麗子の遊び友達であるおマツさんをも描くようになる。鄙びた中にも漁師の娘の生き生きした表情と、当時、大抵の女の子はオカッパ頭だったがおマツさんの母親は毎朝、娘のマゲを結び、そのマゲを結った姿を劉生が気に入ったのだという。劉生はこの二人を競い合せてモデルにしたのである。

私たちは以前、おマツさんにお会いしたとき、「モデルをするときジッとしているのは苦痛ではありませんでしたか」また「ご自分の絵の中でどれが好きですか？」とお尋ねしたところ、「当時絵描きさんのモデルに選ばれているというのは鼻の高いことだったからモデル台に座るのは苦痛ではなかったし、むしろ得意な気分だった。好きな絵は細かい花のヘアバンドをしたもの（1919.4.13）が好き」と即座にお答えになった。

また、「劉生の絵をお持ちではありませんか」の問いに対して「ツワブキの花を持った自分の像の絵を持っていたがいつの間にか失くしてしまった。」と答えられた。その時、もし今あったら大変な価値のものになりますねと皆で笑った覚えがある。ツワブキを持った図柄の絵は、見た覚えがなかったので、それがどんな絵なのかと、ずっと気になっていた。

そして最近、ある古書店に立ち寄った時、東 珠樹著『岸田劉生・椿 貞雄の回想

から』雪華社刊（昭和 36 年 7 月発行）が目止まり、そのページを開くと、おマツさんがツワブキを持った絵のモノクロの写真版が載っているではないか。思わずこれだと思い、この書を買って求めた。この絵が今どこに所蔵されているかを知るため、県立鎌倉近代美術館葉山館の N さんを訪ねた。この時 N さんはたまたまお留守だったので学芸員の M さんに質問し、この方から後日返事を頂いたところによると、

『世界名画全集 続巻 5 岸田劉生・小出楯重』平凡社刊（昭和 37 年 3 月 20 日発行）の中に麗子が書いた「村娘の図」（花持てる）について次の一文があるという報告であった。

「——やはり数多くの村娘の最初の作である。上方に美しい装飾がほどこされ、写実と装飾が一体となっている。村娘お松は近くの漁夫の娘で、母親が時々家事の手伝いに来てくれたのについて来て、私とは仲のよい遊び友達になっていたが父がその顔に興味を持って描くようになった。この図は数多くの於松像のなかでも力作であったが、関東大震災のとき焼失してしまった。このことは父に衝撃を与えそれがまた作画の上で一つの悟りを開かせることにもなった」

また、この村娘之図について劉生が 1918 年 12 月 19 日発行の『色刷会報』に次のような文を書いているのを見付けた。

「——この子がこの羽織と着物を着て学校から帰るところを見て随分いい材料だと思って描くことにしたのでした。麗子の肖像を描いたので子供を描くことに気が向いていたので猶これを描く気になったのでしょう。しかし味はまるで違ったものです。この絵に描こうとしたものはいろいろあって一口には言えませんが鄙びた田舎娘の持つ或る美です。間の抜けた、気の効かない、時代遅れの、善良な感じ、こういう感じの美というものが確かにあります。デウレルやヴァンエックの或る絵にはこの味が美しく出ています。僕もそれらの絵からこういう感じの美の深さを教えられていました。構図もそういうふうに取りました。花を持つ手は素朴に、キョトンと前方を見て無心でいるような感じを取りました。花はツワブキという花でやはりこの感じにふさわしい変な美があると思います。着物や羽織も実に美しいものです。それがいかにも田舎風な模様はその色がさめているのと相まって不思議な美を持っていると思いました」

おマツさんのいっていた絵はこんなにも記念すべき一枚であり、しかももう現存しないことも分かった。



村娘之図
(花持てる)
1918 年 11 月



おマツさんと有田会員



村娘之図デッサン 1918 年 11 月

うれしいことにおマツさんは現在も藤沢市内でご健在である。前述の『世界名画全集』には「村娘之図」(花持てる)がカラー印刷で掲載されているので、その図版をコピーしておマツさんに贈ろうということになり、このページをカラーコピーで拡大複写して、おマツさんにプレゼントしたのである。

すると、おマツさんは非常に喜び「もうこの絵には一生会えないと思っていた」といい、最近では外出することもなかったにもかかわらず、この絵のためにご自分で額を買いに行かれたとご家族からお礼の連絡をいただいた。

この絵については後日談がある。今年4月25日から7月5日まで損保ジャパン東郷青児美術館で「没後80年岸田劉生—肖像画をこえて—」展があり、そのチラシにこの絵と同じ図柄のデッサン画が載っていると知り、さっそく私たちは新宿の同美術館に足を運んだ。会場に飾られたその絵はまぎれもなく、ツワブキを持った村娘のデッサン(鉛筆・紙 34.4×22.6 上原近代美術館蔵)ではないか。

胸が高鳴るのを覚えながら一心に見詰めた。彼女が貰った絵というのはこのようなデッサンの一枚だったのではないだろうか。おマツさんは一番最初に描いてくれたツワブキを持った絵を先生が下さったという記憶が今も鮮明であるという。結婚、育児、戦争等人生の大きな節目を乗り越えて来られて98年、今もお元気なおマツさんにコピーではあっても「思い出の絵」をお手許に届けられたことは私たちの長年の願いが叶い、ホッとしているのである。

(ありた ひろかず)

(さとう かずこ)

参考1：村娘之図一覧

村娘	(1917.8.25) エンピツ、水彩 【モデルは別人『鶴沼』96号参照】
村娘之図[花持てる]	(1918.11.22) デッサン、鉛筆、紙 34.4×22.6
村娘之図[花持てる]	(1918.11.22) 油彩、45.5×38.0
村娘	(1919.2.2) デッサン、インク、紙 23.0×17.0
村娘之図	(1919.2.2) 水彩、テンペラ、紙 34.3×27.8
村娘之図	(1919.2.25) 油彩
村娘之図	(1919.3.15) 水彩、紙
村娘之図	(1919.3.26) 木炭、水彩、紙 37.9×28.0
村娘之図	(1919.4.13) 水彩、コンテ、紙 45.0×33.4

村娘之図	(1919.4.21) 木炭、パステル、紙 40.6×31.6
村娘図	(1919.4.30) コンテ、紙
村娘之図	(1919.6.1) 水彩、紙
村娘座像	(1920.3.14) 水彩、紙
村娘図	(1920.3.15) 水彩、紙 37.7×27.5
村娘於松之像	(1920.6.12) 油彩
村娘図	(1920.10.18) 水彩、紙
村嬢於松之図	(1920.12.31) 水彩、紙
村娘於松立像	(1921.1.7) 水彩、紙 50.3×34.1
村娘像	(1921.1.7) 水彩、エンピツ、紙 33.3×24.4
村娘図	(1922.5.19) 鉛筆、パステル、紙 40.5×31.5

参考 2：色刷画会と色刷会報

劉生は色刷画会というものを創案し、自作を上質カラー印刷した複製を多数の会員を募り廉価で頒布することを 1917 年 11 月に始める。つまり色刷複製画の予約販売である。毎月 1 枚ボール紙の筒にいれて会員に郵送する。それに添付されたのが色刷会報である。作品の解説、次回の予告、今後の予定、印刷所の変更など筆まめな劉生らしく会の現況を詳しく報告している。ちなみに会員は 230 人余、月々の会費は 30 銭であった。

一般に画会とは画家が自作を売るために行う展覧会、或いは、予約販売会をいい、予約販売の場合は画家が会員を募り会費を徴収したのち、創作した自作を会員に届けるシステムをいう。海外留学費用などは、おおむねこうして捻出する。

したがって会員は親戚、知人、友人、郷里の有力者などが殆どで、会員数は、せいぜい 10~20 人程度の場合が多い。

(参考 1、2 は岡田哲明会員の調査による。)

史跡めぐり

鶴沼の「相模国準四国八十八ヶ所」を訪ねて

小池 清志（会員）

梅雨入り宣言の出た前日の6月9日（火）、6月例会の議事を早々に終わらせ、今年の研究テーマである「相模国準四国八十八ヶ所」のうち鶴沼に所在する札所を訪ねる行事が実施された。天候は曇り。参加人数は男性11名、女性6名合計17名。先ず、出発する前に、今日のコンダクター渡部瞭氏から、「相模国準四国八十八ヶ所霊場」の成立に関して、及び、今日のコース、このうちの鶴沼にある9か所についての説明があった。

文化3（1806）年頃、鶴沼・堀川の住人 浅場太郎右衛門が普門寺住職に相談をもちかけ、近郷寺社や村々によびかけ文政3（1820）年頃に成立したとのことである。

フィールド・ワークは25番札所 浜道地藏堂を皮切りに、次は、浅場太郎右衛門の旧屋敷地にある56番札所を訪れた。お堂内には向かって左に石造の大師坐像、右に地藏様が安置されていた。大師は右手に法具の鈷杵、左手に数珠を持っておられた。地藏様は右手に錫杖、左手に宝珠を持っておられた。小さなお堂には「とほつおやの みたままさしく 有あけの 影さやかにぞ すめる堀川」のご詠歌が書かれた板がかけられていた。お堂の前には「南無大師遍照金剛」文政10（1827）年と彫られた石碑が建っていた。

次は堀川から北上して5番札所 原の大師（地藏）堂へ。地藏様はお厨子の中に立っていらっしゃった。頭には赤い帽子が被せられていた。大師様にも赤い帽子が被せられていたのは微笑ましい。

原から北上して、次は大東の町内会館脇にある79番札所。ここは元、普門寺の観音堂があった所だそうで、今も観音様は会館脇の厨子に安置されている。この堂守の浄心は、かつて「相模国準四国八十八ヶ所札所」創設の際、普門寺住職・善応の命令で、四国八十八ヶ寺の宝印と砂を採りに行って来たといわれている。

早昼を藤沢警察からJR跨線橋に向かう途中にあるガスト（ファミリーレストラン）で済ますと、午後のコース。41番 荻田の地藏堂は、案内がなければ気がつかないような路地奥にあった。立札には『相模国準四国八十八ヶ所 第四十一番札

所 荊田稻荷社 正一位作守稻荷大明神 弘法大師』と書かれてあった。

そこから清水へ出て東海道線のガード下をくぐり、空乗寺の前を通過し、高松家の墓がある広い墓地に来た。63 番札所は毘沙門堂とあるので、今までの祠のようなお堂と違って少しは大きいのかと思ったら、さにあらず、私は屈み込んで中の大師さんを覗き込んで立ち上がろうとした時、ゴチンと頭をお堂の軒にぶつけて痛い思いをした。日頃の心がけが悪いせいかわちが当たったのかも…。毘沙門天はどこにもいなかった。

墓地の隣は満福寺で、大正時代の女流作家、内藤千代子の墓や書誌学者の森銑三の墓がある。境内の大きなムクロジュや柏の木が情趣的だった。

満福寺から宮ノ前を通り宿庭の法照寺へ向かった。途中、宮ノ前町内会館前で「首塚」碑を見たが、摩滅してよく読めなかった。

法照寺には、48 番札所の大師坐像が二つあった。どちらも堂内に千羽鶴やお花が花瓶に飾られていたが、一方の大師には座石が無かった。どちらが本物の 48 番の大師様か、もう一つは一体どこの大師様が紛れ込んだか、疑問を持ち始めると謎は尽きない。また、法照寺の境内入り口には「江ノ島弁才天道標」があり、説明板が立っていた。

最後に、東海道線を北から南に渡り、鶴沼小学校前の普門寺へやって来た。山門を入ると境内の右手に大きな「準四国八十八箇所供養塔」が建っていた。その奥に 47 番の石造大師像が安座する大師堂がある。当会会員でもある川島住職が私たちを温かく迎えて下さり、この大師様に参加者全員、各々線香を手向けた。それから本堂へ上がらせていただき、一同着座し、住職の誦経のあと全員で般若心経を唱えたのち、ご仏像を拝見させて頂く。中央には本尊の不動明王が鎮座している。不動明王が本尊であるので、かつて密教系の寺院であったことが分かる。不動明王に向かって右側に智拳印を結ぶ金剛界の大日如来、左側に法界定印を結ぶ胎藏界の大日如来が鎮座していた。須弥壇の右お厨子には 88 番・結願^{けつがん}の弘法大師が安座されていた。今日、今まで廻った弘法大師像はすべて石造だったが、結願大師は美しく彩色された木造で顔付きも大変おだやかであった。

普門寺さんの前を何度か通ったことがある私でしたが、本堂へ上げていただいたのみならず、庫裏で望外の茶菓の接待にあずかり、感激しました。

最後に、今日の企画を担当して下さい渡部さんや世話人の方々のお心遣いに感謝するとともに、今年のテーマ「相模国準四国八十八か所」全調査にますます意欲をかき立てられました。

(こいけ きよし)

鵠沼の白い橋

「鵠沼を画題にした画家たち」

岡田 哲明（会員）

はじめに

鵠沼という一地方の名を有名にした美術家は誰か。それはいうまでもなく、岸田劉生で、彼の生涯のうちで最も充実した画業がなされ、一般に劉生の鵠沼時代と称されている大正 6 年から大正 12 年にかけての鵠沼滞在にあることに異論をはさむ余地はない。

しかし、絵の題名として「鵠沼」を明記した作品を中央画壇に最初に登場させた画家は誰か、それは劉生ではなく、大正 7 年 9 月に開かれた第 5 回二科展における裕伊之助である。

大正 7 年というと米価高騰から全国にコメ騒動が起こり、寺内内閣総辞職、シベリヤ出兵、さらにスペイン風邪の大流行と世情は不穏な空気に包まれていたが、文化芸術活動は活発であり、鈴木三重吉が「赤い鳥」を発刊し、北原白秋が「雨」（雨がふります 雨がふる…）を、西条八十が「かなりや」（唄を忘れた金糸雀は後ろの山に棄てましょか…）を発表した年である。

そもそも、二科会の発祥は文展（文部省美術展覧会）の日本画部が一科（旧来技法流派に属するもの）と二科（新技法新傾向のもの）に分れていて、新しい傾向の日本画家も活動しやすかったのに対して、洋画部は二分されていず、審査側が硬直的停滞的であったため、山下新太郎、津田青楓、有島生馬ら新帰朝者を中心に 1913 年の文展審査に不満を持ち、洋画部にも二科を作るよう建白したが埒があかず、文展を脱退して在野の美術団体「二科会」を結成したのである。このことは大いに世間の耳目を集め、新聞でも大々的に報道された。

その設立の趣旨からいっても、審査は進取の気風と将来性を予見して厳正におこなわれた。いかに厳しく狭き門であったかという点第 5 回二科展では応募総数 840 点中、入選はわずか 106 点であった。

当然、各新聞社の取り上げ方をみても、報知、朝日、国民、読売などの各社ともに、かなりのスペースを割いて報道している。たとえば読売新聞の大正 7 年

9月10日付朝刊では「二科は本日から開場」の大見出しで、昨日の招待日には、殿様では柳沢伯爵、吉川子爵、田中子爵が、大学では小川総長、中川忠順、寺田寅彦、山崎直方各博士が、変わった所では前田病院長、加藤咄堂氏らが顔を見せたとし、今年の取り締まりは昨年より厳しく、海老名君「休憩」、碓君「人体習作」3点、湯浅君「居睡」2点が撮影禁止に、安井曾太郎氏「小女」に取り外し命令が出されたと報じている。また15日(日)は日曜付録として丸々1ページの「二科号」を特集し、有島生馬「二科会の今後」、小川未明「反抗か休息か」、正宗徳三郎「一般にそろっている二科」、有島武郎「二科展覧会を見て」、石井柏亭「今年の二科」といった錚々たる画壇の重鎮らの論評をのせ、翌16日、各賞受賞者の発表には、二科賞は碓伊之助(第1回展につづく2度目)、林倭衛(前年樗牛賞)、鍋井克之の3氏が、樗牛賞は関根正二氏が受賞したと報道している。

余談だが、岸田劉生は前年の第4回二科展に鶴沼で描いた「初夏の小路」を出して二科賞を受賞、賞金100円を獲得している。岸田、碓と図らずも鶴沼を描いた絵が二年連続して二科入賞作となったわけである。鶴沼を愛するものとして、もっとPRしていいことだと思う。劉生は第5回展にも数点出品したが1点落選の憂き目にあい、「豚に真珠」と憤慨して、京都展には出品作を取り下げた。お山の大将でなければ気の済まぬ尊大な気性をよく表したエピソードである。

ちなみに林倭衛は翌年第6回二科展に「出獄の日のO氏」と題した大杉栄の肖像を出品し官憲の圧力で展示撤回を余儀なくさせられた話も有名である。

林は碓と仲が良く、大正10年、一緒に渡仏、乗船したクライスト丸には坂本繁次郎、小出楢重も同乗していた。またの関根正二の樗牛賞受賞作「信仰の悲しみ」は彼の生涯の代表作として評価されることになる。

碓伊之助はこのとき「鶴沼の白い橋」「鶴沼風景」など26点を出品して、会場である上野竹の台会館の一室を独占し、弱冠23歳で2度目の二科賞を受賞している。106点のうち26点つまり入選作の約1/4を独占するというのは尋常ではない。碓はフェウザン会、二科会、春陽会、一水会に所属した画家で劉生の草土社とは関係がないが、木村莊八と碓、岸田の3人が写った写真が劉生展の目録にしばしば取り上げられているから目にされた方も多いと思う。

伊之助の父、碓文七は日本橋木村漆器店番頭ののち明治30年初、向島に碓機械油製造所「丸紀商店」を興し、石油を灯油と潤滑油に分離精製販売をして財をなした。伊之助は三男四女の三男として明治28(1885)年に生まれた。碓家

は家族の静養のために大正初期から鶴沼に別荘を構え、伊之助も病弱な体の養生のため、しばしばこの別荘を訪れていた。劉生が鶴沼の佐藤別荘に越してきてすぐに碇と互いに行き来していたことは劉生の妻の日記に明らかだが、これについては後述する。

大正期から昭和の初めにかけて絵の題名に「鶴沼」が登場するのだが、その多くは草土社のメンバーによる草土社展覧会においてである。ご承知のように草土社は岸田劉生が主宰した画家集団で、その展覧会は一般の公募はせず同志のみの発表の場であったから、画壇の中央というよりは画壇の一隅に存在したグループといった方がいい。劉生が鶴沼に住んだ6年の間、草土社のメンバーは鶴沼詣でをすることになる。木村莊八、中川一政、高須光治、中島正貴、河野通勢、清宮彬などが入れ替わり立ち替わり劉生宅を訪問し、泊って行く。また椿貞雄、横堀角次郎、丸山行雄、岡崎精郎などは鶴沼に住みつく。誰がいつ、どんな題名で作品を描いているかは文末に一覧にまとめておいたから参照されたい。

このメンバー以外に鶴沼を描いた画家として碇伊之助^{はぎすけ}がいるわけだが、それは、彼には、たまたま鶴沼に「碇家の別荘」という拠点があったからに他ならない。

第5回二科展に出品した油絵「鶴沼の白い橋」(碇伊之助画)のカラー印刷絵葉書を碇伊之助美術館の竹本弘幸学芸員が発見され、写真を私に電送して来られたので御披露するとともに、その場所がどこであるかを特定しようと試みた結果をご報告したい。が、その前に「鶴沼の白い橋」が文章で紹介されているので、まずそれを見てみよう。

「鶴沼の白い橋」——今井達夫の記述

鶴沼出身の作家、今井達夫は昭和10年2月14日から19日にかけて報知新聞紙上に『鶴沼にゐた文人』(1)～(6)を連載している。

また彼の没後5年経った昭和58年に「三田理財クラブ二五」という雑誌に『鶴沼物語・湘南の作家たち』(原稿は昭和45年ころ執筆された)が4回にわたって掲載されているがこのいずれにも「鶴沼の白い橋」についての記述がある。

「——地震前、二三年か四五年間のことになる。つまり中村武羅夫氏が終日、泥濘^{どろよ}のやうな小さな川に釣り糸をたれて、今みたいに肥らない顔に浮かぶ神経をなだめようとしてゐた時期になる。その川には碇伊之助^{はぎすけ}氏が描いて有名になった白い

ペンキ塗の小さな橋が架ってゐて、武羅夫さんの釣り場は、そこから半町ばかり上のすこし岸が低くなつてゐる処にきまつてゐた。(以下略)」

(報知新聞 昭和 10 年 2 月 14 日付)

「——新潮社の中村武羅夫が鵠沼へ移つて来たのも、劉生と同じく胸の病気を療養するのが目的だったが、彼も幸い結核ではなかった。しかし、いづらか健康をそこねていたので、毎日外気を吸うため釣を楽しむのを習慣にした。その釣場は海に近い掘割で、本村を通して来る水田用の水がたまつたものらしく、すぐ近くを流れている引地川とつづいていて、上汐ときにはたくさんの鰻が背をそろえて海からのぼつて来るのを見ることができた。

武羅夫の釣場は「鵠沼の白い橋」のすこし上にあつた。この橋を「鵠沼の白い橋」と名付けたのは洋画家の碓伊之助で、そういう題をつけて二科展に出品したので有名になったからである。せまく短い、白いペンキが塗つてあるその橋は、洋画家たちの食欲をそそつたとみえ、岸田劉生も横堀角次郎とカンバスを並べている。(以下略)」

(「鵠沼物語・湘南の作家たち」 第 1 回)

「鵠沼の白い橋」——劉生の記述

岸田劉生の日記にも「鵠沼の白い橋」に関する記述がある。岩波書店刊『岸田劉生全集』第 6 巻から。

大正 10 (1921) 年 1 月 3 日 (月) 雨

「八時半離床。丸山も来て、朝の雑煮を祝ふ。今日で三ヶ日が過ぎる。餅をまた十たべたので腹がくちくちくだったので丸山と散歩に出て、斎藤のわきの道を通つて、アマ寺の前に出た。アマ寺々とよく聞くがはじめてみた。その前を通つて行つたら、小川があつて白い小さな橋のある処へ出た。へんに美しい処だ。鵠沼海岸の河の上流か何かに、こんな処が鵠沼にあつたのかとその瞬間思ったがよく見たら何事だそれは例の白い橋々々々といふの、二つ目の橋でいつも来てゐる処だが只今来た道ははじめてでそこから見るのははじめてだったのだ。印象といふものは不思議なものだ。(以下略)」

筆者注：丸山は丸山行雄（劉生の弟子、鵠小美術教員）。斎藤は鵠沼商店街にあつた斎藤百貨店。アマ寺は慈教庵のこと。



「鵜沼の白い橋」 磯 伊之助（第5回二科展出品作）



「Kugenuma」

1917 5 3

岸田 劉生

「川べり」
(白い橋の風景)
横堀 角次郎



鯉取橋のスナップ
(昭和初期ころ)

「鵜沼の白い橋」はどこに架かっていたか？

ではこの橋のあった場所はどこかの検証に移ろう。次の地図は震災前の大正時代の地図に橋の名前を記入したものである。これは鵜沼郷土資料室の資料による。引地川は今よりずっと江ノ島寄りに河口があり、その本流の北側には細い流れが並行してありそれは西から東に流れて来て途中から南に直角に折れ、本流の片帆橋と汐留橋の間で合流している。

その細い流れの直角に折れるところの橋が鯉取橋、以下上流に向かって和泉橋、一の橋、鉄砲橋と4本の橋が架かっている。

この細い川は今は暗渠になってその上が広い道路になっているが昔はこの小川

に沿って海側に肥え上げ道といわれた細い道があった。鯉取橋は肥え上げ道に掛
っていることになるが、和泉橋、一の橋、鉄砲橋は商店街のほうから来ると橋を
渡って肥え上げ道に接続する。



引地川とその支流に架かる橋



鶴沼の別荘地図 (昭和 10 年ころ)

ふたつの地図を合わせて見ると、吉村邸と蜂須賀別荘の間の道から砦別荘に行

く時わたる橋は和泉橋であることが分かる。碓別荘のあったところは今、マンション「シーサイドコート鶴沼海岸」になっている場所である。碓伊之助が描いた「鶴沼の白い橋」と横堀角次郎が描いた「川べり」（白い橋の風景）は鯉取橋を片瀬のほうに渡った所から上流に向かって見たところを描いている。画面手前の手摺のない一枚板の橋が鯉取橋で橋の先の道は肥え上げ道である。掲載した写真は同じアングルから撮影されたもので或る。道の左側が碓別荘で、小川の右の緑の繁みは蜂須賀別荘（今の国分邸）である。つまり「白い橋」は「和泉橋」ということになる。碓は自宅のすぐそばの風景をモチーフにしたのだった。

劉生が描いた「Kugenuma」の絵は、碓の別荘から商店街のほうに向って橋と道を描いている。手前の欄干が開いているのは肥え上げ道との接続、橋を渡った右側は蜂須賀別荘（今の国分邸）左側は吉村邸（今の「オーシャンプロムナード湘南」）である。

碓伊之助と岸田劉生との交友

碓と岸田とはフュウザン会 1,2 回展（大正 1,2 年）にともに出品したから互いに面識があった。劉生の水彩「Kugenuma」には May 3rd 1917 と日付けが記入されている。鶴沼に来てすぐのころ、まだ佐藤別荘にいたときである。私はこの日付けに注目した。

佐藤別荘時代、劉生は日記を書いていないが妻 蔡^{しげる}が日記を残している。『岸田劉生全集』全 10 巻（岩波書店刊）の月報に、この日記が抜粋されている。

それによると劉生は鶴沼に来て約一ヵ月間は、絶対安静療法を強いられていた。やがて熱も出なくなり、4 月 15 日付には「この頃劉生さまはお天気や曇った日には外で写生をして、雨の日は部屋の中で静物を描いていられる。」ということになる。それは第 4 回草土社（大正 6 年 4 月 20～26 日）の出品作を描かねばならない事情もあった。この時「白き橋を架けたる小川の風景」を展示している。「白き橋を架けたる小川の風景」は少なくとも 4 月 1 日～19 日の間に描かれたことになる。つまり「Kugenuma」の方が後に描かれているが、二作が描かれたのはわずか 2、3 週間のことである。まだ鶴沼の西も東も判からぬ不案内な時期にここまで複数回足を延ばすのは、目的があつてのこと、それは碓を訪問するためではなかったかと私は推測するのである。つまり鶴沼に来て早々に碓が訪ねてきて自分の別荘の場所を教えたか、あるいは碓別荘の場所をすでに劉生に教えてあつたの

かしたのであろう。

日記の抜粋はここからいきなり6月に飛ぶが、この推測を裏付ける劉生と裕との頻繁な交際が以下のように書かれている。

葉^{しば}の日記

大正6(1917)年6月1日

「今は中屋の借家(筆者注:葉^{しば}の誤記、裕の別荘)に、裕さんが来ていられる。

劉生さんは昨日はそこに半日五目並べをしてこられる。(筆者注:裕は五目並べを知らない。福さんという爺やの別荘番が相手だった) 知った方のいられるのはほんとによい」

3日、

「裕さんが昨夜帰っていらした由で今朝劉生さまと行き違いにお願いしたキャンバスを持っていらっしゃる。間もなく劉生さまも帰っていらして午前中お二階でお話していらした」

6日、

「裕さんがよい絵をたくさん持っていられるとて皆さま(筆者注:劉生、長与、犬養の三人)でお出かけになったけれど、お写生にお出かけのあとでじきに帰っていらっしゃる。鶴沼まんじゅうをお出ししてあるけれど劉生さまは召し上がれないのでビスケットを買いに出たら帰りに裕さんの帰っていらっしゃるのにお会いして宅にお出で下さるようお約束する。やがてその絵をどっさり持ってお出かけ下さる。私もお二階でその絵を見せて頂く」

7日、

「朝食後劉生さまは昨日の絵をお返しに裕さんのお宅へ行かれ爺やと五目並べをして疲れたとおっしゃって11時頃お帰りになる」

10日、

「劉生さまは今リーチの作ったお茶碗とビンと林檎を描いていられる。それをすませて裕さんへお出かけなさったら今、川幡さんがいらしてお二方で宅へいらっしゃった由で急いでおまんじゅう買って帰っていらっしゃった。けれどもまだお見えにならない。やがてじきにお二人が見えた」

7月3日

「6月24日にこの家に移転した。椿さんがお手伝いに来て下さった。(中略) 四日ほど前から中川様が泊まりに来ておられる。しばらく泊っておられるのだ。

この家に来てからちょうど中川さんの来られた日に信州から河野さまが見えて一泊して帰られ、また三日ほど前には清宮さんが見えたし、昨日からは横堀さんが来ていられる。まことに賑やかでまるで代々木にいた頃のような感じがする。昨日はこの二人と裕さんも来られてつい珍しさに1時頃までトランプをしたので今日は劉生さま寝不足でお仕事も出来ずお風呂召して9時前には寝てしまわれた」

じつはこの^{日記}の日記をもっと調べたいと思い、先日、劉生の孫の岸田夏子さんに会った時に、この日記の所在を尋ねたところアルバムなどとともに国立近代美術館に寄贈した筈だから、そちらにあたったら、という話であった。いずれ機会を見て、抜粋で抜けた部分を読んでみたいと思う。新たな発見があるかも知れない。

鶴沼を題名に持つ諸作品

これで「鶴沼の白い橋」は画家の格好のモチーフであった事がお分かり頂けたと思うが、「白い橋」のほかに「鶴沼」を題名に持つ作品が何時、誰によって描かれ、発表されているか、画集や展覧会目録から拾ってリストにまとめたのが下表である。

大正5年10月21日 劉生展画集（1990年）

「鶴沼風景」素描水彩 岸田 劉生

大正6年2月10～20日 草土社 名古屋展

「鶴沼の川」素描水彩 岸田 劉生

大正6年4月20～26日 第4回 草土社展

「白き橋を架けたる小川の風景」油彩 岸田 劉生

大正6年5月3日 劉生展画集（1990年）

「Kugenuma」素描水彩 岸田 劉生

大正6年12月15～24日 第5回 草土社展

「鶴沼の或る路傍」油彩 岸田 劉生

「風景（鶴沼）」油彩 中川 一政

大正7年9月10～30日 第5回 二科展

「鶴沼の白い橋」 裕 伊之助

「鶴沼風景」 裕 伊之助

大正 7 年 12 月 14～23 日 第 6 回 草土社展

「鵠沼風景 (1)」	川幡 正光
「鵠沼風景 (2)」	川幡 正光
「鵠沼の或る道」	椿 貞雄

大正 8 年 12 月 8～17 日 第 7 回 草土社展

「鵠沼の景色」	岡崎 精郎
---------	-------

大正 9 年 12 月 15～24 日 第 8 回 草土社展

「鵠沼の或る道」	椿 貞雄
「白い橋の風景」	椿 貞雄
「鵠沼の或る道」	中島 正貴
「鵠沼風景」	丸山 行雄
「鵠沼のある風景」	横堀角次郎

大正 11 年 11 月 4～13 日 第 9 回 草土社展

「鵠沼の或る道」油彩	椿 貞雄
「鵠沼海岸小景図」油彩	椿 貞雄
「晴日の鵠沼風景」油彩	横堀角次郎
「鵠沼小景」油彩	横堀角次郎
「川べり」油彩 (白い橋の風景)	横堀角次郎

大正 12 年 5 月 第 1 回 春陽会展

「鵠沼小景」	横堀角次郎
--------	-------

大正 13 年 3 月 第 2 回 春陽会展

「鵠沼小景」	横堀角次郎
--------	-------

大正 14 年 3 月 第 3 回 春陽会展

「鵠沼の道」	横堀角次郎
--------	-------

昭和 2 年 4 月 第 5 回 春陽会展

「鵠沼小景」	横堀角次郎
--------	-------

昭和 12 年 11 月 第 1 回 一水会展

「鵠沼の思い出」油彩	裕 伊之助
------------	-------

(おかだ てつあき)

くげぬま断章（Ⅱ）

山上 英男（会員）

僕は鶴沼の東屋の二階にちつと仰向けに寝転んでゐた。

その又僕の枕もとには妻と伯母とが差向かひに庭の向うの海を見てゐた。僕は眼をつぶったまま、「今に雨がふるぞ」と言つた。妻や伯母はとり合ひなかつた。殊に妻は「このお天氣に」と言つた。しかし二分とたたないうちに珍らしい大雨になつてしまつた。

（芥川龍之介『鶴沼雑記』）

この「鶴沼雑記」は1926（大正15）年7月に書かれた。

その一年後の1927（昭和2）年7月24日、芥川は自らの命を絶つた。

上記断章の、突然の大雨は局地的な夕立であつたかもしれないが、それにしても、そのかすかな兆しを過敏に感じてしまう芥川晩年の神経が、まるで普通のこゝろのように坦々と表出されている。

「雑記」は続けて、振り向いた犬がにやりと笑つたと言ひ、松林の中の白い洋館が、風に曲がつた松と同じように歪んでいと記していく。

七月の湘南風景が不安な予感でつつまれる。痛々しい文章だ。

しかし、その病んだ神経のなかで、芥川は『河童』（昭和2年2月）を書いていたのだ。これには強靱な作家魂を感じてしまう。

健康の悪化に苦しみながらも、あくまで虚構（フィクション）で、創作で、勝負しようとしたにちがいない。創作者としての作家精神は病んでいない。

特に『河童』の虚構は、〈笑い〉を通して人間疎外の問題をえぐっている。

失業した労働者をガス室で集团的に処分し、食肉化していく河童国のありさまなどは、まるでナチズムの出現を予言していたかのようだし、蛙といわれることは人非人という意味になるこの国で「お前は蛙だ、蛙だ」と決めつけられて、その果てに善良な河童が自殺に追い込まれていく様子などは、今の日本の現実に重

なって、ぎょっとさせられる。



ずいぶん前のことになるが、この芥川の命日（7月24日・河童忌）に、その墓がある巢鴨・慈眼寺をコースに入れて、下町散歩をしたことがあった。職場の同僚など友人6人ほどで、のんびり歩いた。

慈眼寺には谷崎潤一郎や司馬江漢の墓もあるが、「きょうは河童忌だから」と言いながら、仲間の一人が魔法瓶のお茶を芥川の墓に手向けた。
愛用の座布団と同じ寸法でつくられたという墓石は小さくつつましかった。

腕組みをしながら同僚のひとりが「あの瘦身の龍之介と、この墓の印象は少し違うなあ」と言った。どうも彼はもっと鋭角に切り出された卒塔婆のような墓石がふさわしいと思っているらしかった。

それを聞いて皆は「それはまたずいぶんな思い込みだ」と言って笑った。



夕方、浅草へ出て〈駒形・どぜう〉で食事にした。
あれこれ話は飛んだが、当然この日の談は、何かと河童に及んだ。

誰もが芥川の河童図は気に入っていた。

特に、右肩に長い茎の蒲^{がよ}の穂を背負って、左手に魚を下げた痩せ河童が、こちらをギョロッと振り向いた「あの絵がいい」と言った。

〈水虎晩帰之図〉である。私も好きだ。

これは、子どものころ遊んでいるうちに、ひとりぼっちになっていることにふと気がついて急に怖くなった、そんな夏の日を私に思い出させるのだ。

そんな意味のことを言うと、友人の一人が、「龍之介は、自分が描いた河童を〈怖くなくても少しは怖がってくれよ〉なんていう手紙を、友人に出してるんだ。

ユーモリストの一面が見える手紙だよ。怖いと思わなきゃね」などとその方面

の素養を感じさせながら、軽やかに応じてくれたりした。

小川芋銭おがわ うえんのかっぱの絵がいいという熱弁もでた。

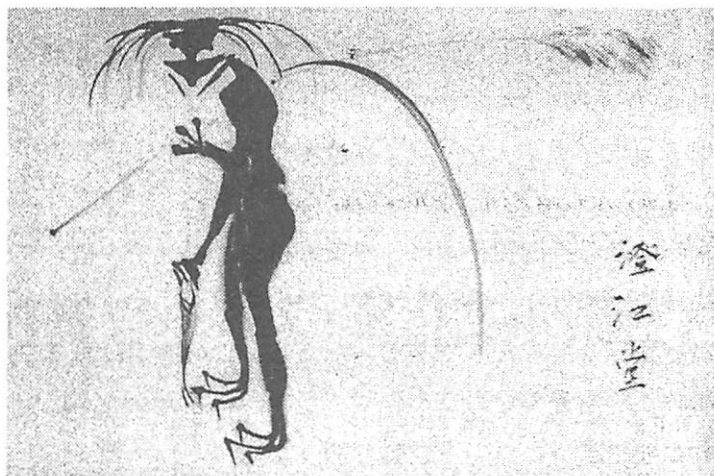
私も、「清水崑しみず こんのかっぱはほのぼのしてて実にいいし、小島功の女かっぱのお色気も好きだ」と言えば、「哲学的な細身ほそみの河童から、いっきに豊満なかっぱに鞍がえしたもんだなァ」と冷やかされた。

誰だったか「一般的に女の人は河童という存在に興味がないね」と強調して2人の女性から「そうかしら」なんて、論戦を挑まれたりしていた。

芥川の命日ながら、陽気に盛りあがった一日だった。

河童忌や 夏瘦せもなく どじょう汁

(やまがみ ひでお)



指 の 環

今井 達夫

- 昌江ガ火燵ノナカデ吉野ノ膝ニ手ヲヤリ、吉野ハソノ上ニ手ヲカサネ握リ合
ツタ。初冬ノコロ。ホカニ火燵ニアタッテイタ者ガアルガ、氣ヅカレナカッ
タ。
- 新シイ年ニナッテ間モナク、吉野ガ奥サン好キダト云イ、昌江モアタシモヨ
ト答エタ。
- ヒト月ホドシテ、吉野ガ接吻ヲ求メタノニ対シ、昌江ハコレヲ拒ンダガ、タ
ビタビ求メラレテイルウチニ許スヨウニナッタ。三月中旬ノコロカ。
- 接吻ノ期間ガホボヒト月ツヅキ、ソノ日吉野ガ興奮シテ昌江ヲ抱キペッティ
ングヲホドコソウトシタ。昌江ハコレヲ拒ミ、ソノ代り自分ガヤッテヤルト
云イ、遂情サセタ。
- ヒト月ホドシテ、二回目ノペッティングヲ遂情サセタ。
- サラニヒト月ノチ昌江ハ吉野ノ求メヲ拒ミ、ペッティングヲホドコサナカッ
タ。
- 吉野ハソノ後求メナクナリ、ソノ秋療養生活ヲ切り上ゲ帰京シタ。

ある私立大学の助教授内田祐司は、書斎の机にこのメモを置いて、幾箱かのタバコをむだに喫いつづけた。異様な状況において口をすべらせた妻を五日間追及して得た告白を整理してみたのである。ただし、この事実は五年前の出来事であり、内田はそのころもその後もほんのすこしの疑いさえかんじていなかった。これを知らされたのはまったくの不意討であった。

内田は四十一歳昌江は三十二歳、去年の春結婚満十年を迎えた。子供がないので会合などにも連名で案内が来ると揃って出席し、仲のいい夫婦としてみとめられていた。昌江は山梨県の酒造家の次女で、高校卒業後東京渋谷の姉の婚家先に寄宿して洋裁学校に一年間かよった。内田は恩師にその知人である山梨県の酒造家の家へ伴われて行きそれが見合いになって、結婚まで進んだ。東京づれをして

いないと同時にまったくの田舎娘というのでもなく、おっとりとした性格のなかに若干の茶目っ気を含んでいるところに、内田は目をとめたのである。彼の教室に出席する女子学生のなかにも候補者はあったが、頭の回転のはやい長所を敬遠して、むしろ対蹠的な昌江を選んだのであった。するどい頭脳の回転は彼の助手としては役に立つと思ったが、それがともすれば批判者になるのを恐れたのである。内田はそういうふうでない家庭生活を望み、また地方の旧家の枠のなかで成長した昌江はほぼ彼の希望に添った主婦として、十年間大過なく過ごしてきたと思っていたのだが。……

吉野英吾は現在ある貿易会社の社員で、内田がメモを書いた三月下旬よりひと月前インド支店へ次長に抜擢されて赴任した。五年前この湘南の海岸町へ入院加療後の療養生活に来ていたのは大学卒業年度の前年である。脊椎をやられた病気で、来た当座は農家のはなれで寝たり起きたりの状態だったが、間もなく適度な運動をすすめられる回復期になると、毎日のように内田のところへ遊びに来た。教室では内田の学生であり、同じ三重県人であることに親しくなる便宜があり、教室ではさほどとは思わなかった才気の片鱗をみとめた内田は、その点に愛情をおぼえた。翌年卒業に際しては休学学生の不利をかばって、知人のいる貿易会社に足を運んで就職を成功させたほどである。昌江よりふたつ年下で、昌江はそのころ弟に対するごとく世話を焼いていると思っていたのだが。……

昌江が五年も前の吉野とのそういうことについて口をすべらせたのは、こういう状況においてであった。前に異様なとあったがそれは内田の主観であって、こだわる必要はない。五日前の日曜日、中学以来の気のおけない友人が訪ねてきて、ウイスキーを飲んでいるうちに話題がエロティックな方向に転じ、ひと月ほど前内田が鎌倉の友人から借りて来た英文のポルノグラフィーを持ち出した。貸してくれた友人がこれはヌーベル・バーグだぜといった通り、ベッド・シーンの露骨な描写はもちろんあるにせよ、スノビズムに対する辛辣な調和を基調としている構成に特色があった。

そのなかに人妻が学生の童貞を奪う部分があり、友人が帰ったあと酔った昌江が内田を彼女のベッドへ招き、抱擁しながらそれを話題したのが発端になった。そういう話題から刺戟を受けたとみえ、昌江は毛布の下で身につけていたものを全部はぎとったからだを内田にすりよせてささやいた。

「さっきの話、おもしろかったわ。男なんてああいうふうにして覚えるものなの？ あなたはどうだった？ 聞かせて。やっぱりよその奥さま？」

昌江がこういう話題に好奇心をもやすのは、内田の飼育のゆえであった。閨房ではどんなに奔放であっても奔放でありすぎることはない、処女で彼の妻になった昌江に教えこんだのである。昌江は素直に彼の教導を受けいたばかりでなく、さらに自発的にそれを求める素質があった。この種の話は昌江にとって常に、アペリティブであった。前に最初の経験について質問を受けたときは言葉をごした、このときふと昌江のアペリティブ要求に応じる気持ちになって内田は話をつくった。実際には大学予科生のころ同じアパートの銀座のバアの年増女に誘惑され遊ばれたのであったが、もっとロマンティックに色彩をつけたのである。

「僕の場合はよその奥さんではなくて残念だが、未亡人だった。六つか七つ年上で、旅行にいくときエスコートをたのまれてついて行った先でそういうことになったのさ。海に見えるホテルで、いい月夜だった。それだけはおぼえている。」

「ずるいわ。もっと詳しく話して。どうだったの？ よかった、その奥さま。」

「こっちは夢中さ。好奇心もあったが、怖いような気もした。」

「やっぱりこんふうにペッティングして興奮したの？ 教わった？ ここにキスすることなんかも。」

「だんだんにはね。」

「ずっとつづいたの？」

「いや、ほんの短いあいだだった。その人は間もなく再婚してしまったから。」

昌江の情欲が話しているうちにますます燃え上がってくるのを、内田の指が知った。アペリティブはこれくらいで十分だろうと、内田は昌江をからかった。

「ずるいぞ、僕にばかりはなさせて。君はどうなの？ ペッティングぐらい経験したことあるんじゃないか？」

内田としてはこれもアペリティブの揶揄であった。結婚初夜、その後しばらくの期間の記憶は、昌江がそんな経験の持ち主ではないことを教えていたからである。が、反射的に否定するだろうと思っていた内田は、彼の肩に押しつけている昌江の頬の線が動くのをかんじた。昌江は含み笑いをして、生あたたかな息が彼の皮膚をくすぐった。

「あるわよ。あたしだってそれくらいのこと。」

「ホウ。そいつは立派だ。相手は誰だ？」

内田はそのとき昌江もつくり話を考えついたのだと思い、どんなつくり話を考えついたのだと思い、どんな話をつくったのかと興味をそそられた。

「あたしはやってもらわなかったけれど、向こうのは手で出してやったわ」

「一方的か。それで、相手は誰なんだ？ いったっていいじゃないか。」

「英ちゃんよ、相手は。」

昌江はためらいのない語気で、口をすべらせた。あとになってどういう気持ちでしゃべったのだと追求すると、彼のつくり話にむかむかして対抗的な気分をそそのかされたからだといったが、すらりと口をすべらせた昌江の告白には生々しい実感があつたばかりでなく、平俗な表現を借りれば、のろけている気分の甘ったるいニュアンスがあつた。

つくり話ではないと悟ったとき内田のうけた衝撃には複雑な要素がこんがらがっていて、ずばりと説明するのは困難である。感覚的には突然足をすくわれてからだが宙に浮きあがった不安定を実感した。

「ちょっと、手洗いに行ってくる。」

内田はからんでいる昌江の脚からすりぬけて、ベッドを下りた。手洗いからもどって来て自分のベッドにあぐらをかいたとき、内田をおそっていたのは、被侵害感であつた。

しかし、内田は語気をおさえていった。

「起きないか。その話をもう少し聞こう。」

ベッドに寝たまま内田の行動を訝かしがる目で見守っていた昌江は。いわれる通り起き直って裸身にガウンを羽織った。わるびれないというよりむしろ日常的な昌江の態度は内田に奇異な印象をあたえたが、後日その態度の気持を問いただしたところ、五年前のそのことには格別裏切りをかんじていなかったからだと説明を与えた。これに対して内田はさらに追及したが、話が前後するからここでは保留しておく。内田はまず吉野との時期を訊いて、五年前であることを知った。

「それはどういうふうにして、そういうことになったのか。」

「だって、英ちゃんがとっても興奮していたのだもの。」

説明を求めたのに対して、返事をためらうか口を閉ざしてしまうのではないかと考えて、できるだけおだやかな語気で切り出した内田はまた肩すかしを喰らった奇妙な気持におそわれた。昌江はやはり日常的な会話のごとく彼の質問に応じて口をひらいたのである。

×

そして、五日間の質疑応答があつて冒頭のメモができあがったのだが、それは

簡単に順序よくはこんだんだのではなかった。内田の質問も前後左右に分裂したが、昌江もわからないといったり忘れたと頭を振ったり、そんなつもりではないと彼の説明的質問を否定したりして、順序をたてるのが困難であった。それゆえ昌江の説明を整理するためメモをとったのだが、もっとたくさん具体的説明を昌江は与えた。ふたりの五日間にわたる質疑応答を冗を省いて記録してみる。

「吉野の方から先に奥さん好きだと云い、君があたしも好きよと答えたのだね。」

「そうよ。でもあたしにすれば、かるい意味で、弟みたいな気持でいったのかわ。」

「それは一度だけか、幾度もくりかえしたか。」

「冗談みたいな云い方でときどきくりかえしたわ。」

「そのうちに、キスをすることになった。どっちが求めたのか。」

「もちろん、英ちゃんのほうだわ。あたしは、そのたびに拒んだわ。何するのよって。」

「そのうちキスをするようになった。どういう順序だった？」

「病氣あがりとは思えない力で抱きしめられたの。」

「そして、口をつけてきたのか。」

「拒んだけれど、とっても力が強かったのだもの。」

「そういうキスを幾度かくりかえしているうちに、ある日ペッティングになったのだな。その前後を具体的に説明してもらおう。そのときも吉野が君を抱いてキスをしながら求めたのか。」

「求めたというより、あたしのをいじろうとしたから、そんなことをすると内田と別れなければならぬって拒んだのよ。」

「いじろうとしたのか、そこまで手が届いたのか？」

「ちょっとだけさわったわ。だから、いけないって拒んだのかわ。」

「それはパンティの上からか中へ入れたか。」

「中へいれたけれど、ちょっとだわ。」

「それで君は拒んで、それならペッティングでやってやるといったのか。」

「だって、あんまり興奮しているので、そういつてあたしのをいじろうするのを避けたのかわ。」

「そうしたら、どうした？」

「たのむと云って、ここへ出て来てソファに腰かけたの。」

「そこへ君も来て、やってやったのか。ここへ出て来て前はどこにいたのだ？」

「日本間にいたわ。お花をいけたのを見るために日本間へ行って、坐って話を

していたの。」

「坐っていて、君に抱きついたわけだな。それで君を押し倒そうとしたのか。キスしながら押し倒すようにして、君のパンティに手を突っこんだのか。」

「押し倒そうとまではしなかったわ。」

「吉野はペッティング以上のものを求めていたのか。」

「そんなことはないと思うわ。」

「じゃ、どうして、吉野がそれほどまでに興奮しているのがわかったのだ？」

「……」

「おかしいじゃないか。それほどまでに興奮していなかったとすると、君の方からペッティングしてやろうと云い出さなくてもすんだのではなかったか。」

「わからないわ。でも、そういう感じだったの。」

「よろしい。それで吉野は君にそういわれて、おとなしくこのソファに来て腰をかけた。そこへ君も出て来て、ペッティングをやってやったのだな。吉野はズボンを脱いだのか。」

「ズボンなんか脱がなかったわ。」

「じゃ、ズボンから出したのか。君が出してやったのか。」

「自分で出したの。」

「それを君が握ってオルガスムスまでやったのだな。それはズボンから出したとき、完全に興奮していたか。」

「ええ、びっくりするほどだったわ。」

「それでどれくらいの時間ペッティングをしてやったら、オルガスムに達したのだ？」

「わからないわ。」

「ひどく長かったか、それとも短い時間だったか。」

「そのまんなかくらいだったと思うわ。」

「オルガスムに達して放出したとき、君が始末してやったのか。」

「英ちゃんが自分でしたわ。」

「紙は君が出してやったのか。」

「英ちゃんが前から出しておいたわ。」

「放出するところを、君は見ていたのだな。」

「……」

この無言は肯定を意味していた。この回答について、内田はこういうメモを書

いている。

——コンナ質問ヲ浴ビセカケタノハ常軌ヲ逸シテイルトモ思ウガ、ソシテ僕ニハ自虐ノ狂イガアリ、スラスラトコンナコトマデ答エル昌江ニ対シテ嗜虐的ナ氣持ガ全クナカッタハイワヌガ、スラスラト答エル昌江ニムシロ誘イコマレタトコロモアル。シカシ、僕ノホントノ目的ハ、昌江ト吉野ノ行為カラフタリノ心理ト真意トヲ探リタイタメデアッタ。ソレヲ探リトッテドウスルノカ。フタリニ対スル僕ノ決意ハホトンド決ッテイルガ、ソレヲ決定的ニスルタメニハ真実ヲ知ッタウエデナケレバナラヌト判断シタノダ。ソノ意味デ昌江ノ答ヲ検討シテミルト、嘘ガアルカナイカハ俄カニ決シガタイガ、不明ノ空白ガアマリニ多い。僕ハコノ空白ヲ埋メルタメニハ、サラニ再質問ヲ要スルコトガワカッタ。質問条項ヲキビシク検討シテミヨウ。ガ、ソレニシテモ、ドウイウツモリデ昌江ガ僕ノ常軌ヲ逸シタシツモンニ対シテ、逡巡スルコロナク説明ヲ与エルノデアロウカ。特ニ吉野ノソレヲ見ル瞬間ビックリスルホドダッタトイウ説明ハ、質問ニ答エタトイウヨリハ自発的ニ述ベタ感想トシカ受ケトレナイ。無恥トイウヨリハムシロ氣味ガワルイクライデアル。昌江ノコウイウ性格ノ部分ニハジメテ触レタ驚キハ、僕ヲ混乱サセルニ十分ダッタ。シカシ、黙秘権ヲ使ワレタコトヲ考エレバ、コノ不可解ナ性格ニ嫌悪感ヲ感ジルノヲオサエ、コンナ氣ブリヲ見セズ、利用スルコトニシナケレバナラヌ。

この晩内田の訊問は尚つづいたが、彼が重要なポイントとして再質問をおこなった部分の会話を先きに採録した方がいいと思う。順序は先後するが、翌晩やはりホールのソファでおこなわれた問答を並べてみる。浴後ウイスキーを飲みながら、表面日常的な雰囲気をつくったのは、尚昌江の逡巡を恐れたためである。

「昨晚訊くのを忘れたが、君は吉野がオルガスムに達するまでペッティングをしてやりながら、君の方はどうだったのだ？ 吉野の興奮の度が高まるのは、君の指が知ったろう。それで君も興奮したか？」

「あたしは、全然興奮なんかしなかったわ。はじめから冷静だったもの。」

「はじめからとは？」

「英ちゃんが抱きついて、あたしのパンティに手を入れたときからよ。」

「すると君は冷静な気持で、ペッティングしてやると言い出したわけか。」

「だって、そうしなければ英ちゃんの興奮が怖かったもの。」

「それほど興奮していたのだな。つまり、君にペッティング以上のものを求める気配がしたのか。」

「そういわれれば、そうかもしれない。」

「つまり、吉野は君にペッティングして、君を興奮させようとしたのではないか。」

「それほどだったとも思えないけれど。」

「吉野が日本間からこのソファへ来たといったな。ペッティングしてやろうといったから、おとなしく出て来たわけか。そして、君があとから来てやってやったわけか。」

「そうね。」

「そこのところがちょっとわからない。君は吉野の興奮が怖くなり、君へのペッティングをやめさせるためにこっちからやってやるといったといったが、吉野がおとなしくここへ出て来たあと、日本間から庭へ逃げることもできたのではないか。」

「……」

「それにもかかわらず、そばに行ってやってやったとなれば、君の自発的な行為ということになるな。それは吉野に対する愛情か。」

「愛情といったって、弟に対するみたいなもので、性的な気持はなかったわ。英ちゃんに性的魅力なんかかんじなかったもの。」

「じゃ、独身だった吉野の性的興奮、切迫感にたいする同情か。」

「同情もあったけど。」

「好奇心がそそのかしたのか。」

「そうね、好奇心はあったと思うわ。」

「そして、君は吉野がオルガスムに達するまで、ペッティングしてやった。そのあいだ君は冷静でちっとも興奮しなかったといったが、吉野のを握ったときはスリルを感じなかったか。はじめて見てたくましさにおどろいたあと、はじめて手に触れたのだ。」

「スリルはあったわ。」

「それじゃ、もう一度訊くが、吉野ははじめ君のからだを求める気配はなかった、それをみとめなかったといったな。」

「そうよ、そこまでは求めていなかったと思うわ。」

この問答についての内田のメモ。

——前夜ヨリモコマカナ説明ヲ得タ。前夜トチガウ点ハ最初吉野ガ昌江ノカラダヲ求メル気配ヲカンジタトイウコトdeal。トスレバ、前夜ノ否定ハ吉野ヲカバッテイタトモイエル。シカシ、今夜ノ肯定モ断定的デハナイ。ソウイウ気配

ガナカッタノナラ、自分ヲ守ルタメニペッティングヲ自発的ニ申し出タコトニナルゾトイウ詰問ニ対スル防衛ノ氣持ダッタカトモ思ウ。アイマイナ肯定ハソレユエカモ知レナイ。ソシテ、庭へ逃ゲルコトモデキタデハナйкаトイウ指摘ニタイシテ無言ダッタノハ、自発的デアルコトデ肯定セザルヲ得ナイ矛盾ヲ悟ッタカラデハナйка。矛盾トイエバ、カノ女自身ハ氣ヅカズニ矛盾シタ説明ヲシテイル。愛情ハ弟ニ対スルゴトキモノ、同情カトイエバ同情モシタケレドト弱イ肯定ヲ示シ、誘導的ニ好奇心トイウ言葉ヲ持ち出ストコレニトビツイタ。ソノ間カノ女ノホウハ興奮シナカッタト前夜通り力説シタガ、コレハ明ラカニ自己防衛ノ意識ガ働イテイタタメト考エラレル。自分モ一緒ニ興奮シタナルト僕へノ裏切りノ程度ガ数倍ニナルトミトメラレルノヲ本能的ニ避ケテイタト考エラレル。幼稚ナゴマカシダ。吉野ノソレヲ見テ瞠目シニギッタトキスリルヲカンジタト白状シタガ、スリルガ興奮ヲ伴ナウモノダトイウ原則ヘノ矛盾ニハ氣ヅイテイナイ。滑稽デアル。ソシテ、最後ニモウ一度訊クト、吉野ハカラダヲ求メテイナカッタトヤスク前言ヲヒルガエシタ。コレハ真実デアルカ、アルイハ吉野ヲカバウ潜在意識ノアラワレカ。コノ点ツカミトレナイコトガ僕ヲ悩マス。ソレニシテモ、ペッティングノ数分間、フタリノ心理経過ハドウアツカ。ソレガ鍵ニナル。タメシテミナケレバナラヌ。

×

内田のうけた衝撃の複合体のなかでまず最初にいちばんつよく彼を打ったのは被侵害感であることは前にいったとおりだが、その場合侵害者は言うまでもなく吉野英吾であった。昌江を訊問せずにいられなかった苛立ちについて、内田は理屈を並べたが、もっと知りたかったのは侵害の程度にあったと見た方が正しいのであろう。だが、昌江の奇怪なほどためらいのない告白を聞いているうちに、内田は自分の立場がすこしづつ微妙に変化を来たしたのを悟って、新しい衝撃におそわれた。前章の昌江の告白を聞いているうちにおこった変化は、被侵害感のそれから被疎外感へのそれであった。それまで自分と昌江との世界に侵害をうけたとおもっていたのが、昌江が彼との世界を同時に吉野との世界を持ったという事実を目の前に突きつけられたからである。

昌江と吉野とは彼の認識のそとの次元で一つの世界を作った。五年前の時限はもはや追いつくことができないともいえる。 また、まきもどすことも不可能で

ある。

内田はその世界から完全に疎外されて、この五年間を生活してきたのか。

「僕にはまだわからない。そのとき、こういうふうに並んで腰かけたのか。」

内田はソファの中央に、昌江はその左側に腰かけていた。内田は昌江がうなずくを見て、つづけていった。

「言葉の説明ではわからない。そのときとすっかり同じことをするのだ。吉野はこういうふうに君の肩に手をまわしたのか。そして、君はどういうふうに吉野によりそったのだ？ やってみるのだ。」

昌江のとまどっている目をみると、さらに語気がつよくなった。

「やるのだ。そのとき通り。やっているあいだ、吉野はおっぱいぐらいいじったかも知れないといったな。こうしたのか。」

内田は頸にまわした手をニットブラウスの襟から昌江の胸に伸ばして乳房をつかみながら、一方の手で彼のそれをズボンから出した。昌江は彼の肩に頬をのせ、従順な家畜の目になって、彼のそれを握りゆっくりとこすりはじめた。

「見ていたのだろう。見ているのだ。」

内田も昌江の指の動きに視線を向けた。環になった指がゆっくり上下している。
——僕ハコノ行為中、自虐ト昌江ニ対スル嗜虐トノ暗イ喜ビヲ齒ギシリトモニ味ワッタヲ恥ジル。真実ヲ追求スルコトト自虐ヤ嗜虐ノ喜ビニ溺レルコトトハ無関係デハナイカ。シカモ真実ヲ追求シ得タカ。ノウ、ダ。昌江ノペッティングヲ受ケテモ僕ノ情慾ハ昂進シナカッタガ、嗜虐慾ガタカブリ、
「ソノトキ吉野ハコウイウフウニシタロウ？」

ソウ云イナガラ昌江ノパンティニ手ヲ突ッコムト、

「ソウショウトシタケレド、拒ンダワ。」

ト、僕ノ肩ノ上デ頭ヲ振ッタ。ガ、僕ノ手ヲ拒モウトシテイナイ。僕ノ嗜虐慾ハ拒マナイノヲイイコトニシテ、昌江ノソコニ触ッタ。スルト、僕ハ異様ナ欲情ニオソワレタ。モハヤ昌江ハ僕ニ責メラレテイルコトヲ悟ッテイルハズダノニ、ソコハ手ヲフレル前カラ不断以上ニ濡レテイタノデアル。

「ソレミロ。ソノトキノコトヲ思イダシテイルデハナイカ。ソノトキモコンナフウニナッテイタノダロウ？ 隠スナ。」

「ウウン、チガウ。アナタトコンナコトシテイルカラ、オカシクナッタノヨ。アノトキナンカ絶対ニ。信ジテ。」

昌江ハ僕ノ背中ニマワシテイル手デシガミツイタ。コノ言葉ガ真実デアルカ否

カハ、当人自身カソコニ手ヲフレタ吉野以外ニハ知り得ヌコトダ。信ジヨトイ
ウ言葉ヲ鵜呑ミニシテ信ジルコトノデキル心理状態ニ僕ハオカレテナイ。シカ
モ、昌江ハ情欲ノ波ニ溺レ、溺レテイルコトヲ隠シサエデキヌ興奮状態ニオチ
イッタ。ソレガ僕ノ情欲ヲカキタテタノヲ、僕ハ暗鬱ナ気持デ自覚シタ。僕ハ
昌江ノ肩ヲ抱イタママ立チアガリ、寝室ヘ誘ッタ。昌江ハ唯唯トシテ従ッタバ
カリデナク、閨房ノ悦楽ヲ日ゴロノ何倍カムサボッタヨウデアル。ナンタルコ
トダロウ。シカシ、コノ場合ダケデナク、ソノ後モ僕ガ荒イ言葉デ責メルトカ
ナラズコウイウ現象ヲ呈シタノデ、僕ハ迷ッタ。吉野ヲ話題ニシテイルタメ
カ、ソレトモ、昌江ノナカニマゾヒズム的要素ガアルタメカ、迷ワザルヲ得ナ
カッタ。シカシ、マゾヒズム的要素ガ昌江ノナカニアルコトハミトメナイワケ
ニ行カズ、結婚十年ソナ要素ニ気ツカセナカッタ女トイウモノノハカリ知レ
ナイ性格ニ、僕ハ恐レヲオボエタ。

内田はこのメモで自虐とか嗜虐とかを持ち出し、昌江に対する観察をもっとも
らしく述べているが、自虐や嗜虐のよって来る本体を直視するのを避けている。
昌江に向けた訊問を常軌を逸したものとまでは自認しているが、なぜ常軌を逸し
た質問を向けずにいられなかったか、自分の精神状態が平衡を失していることに
対しても目をそらしている。昌江の従順な家畜の目を見、素直なまでの臆面ない
返答に驚き、また、昌江の情欲の昂進に対しては疑いを持ったが、彼自身につい
て省察することを避けている点には気づくまいとしている。昌江と吉野に対する
決意はほぼ決まっているとメモには書きながら、具体的な条件はペンにしていな
い。ほぼというのは修飾語にすぎなくて、まだそれ以前であることは明らかであ
る。

こういうことが云えると思う。彼でも彼女でもいい、その人物が内蔵している
性格や気質、慣習的な日常生活のなかでは自然にかくれていたそういうものが、
異常なというか非常事態というかそういうものに面するとにわかに拡大してあら
われるということだが、

この場合もそれであった。内田が目をみはった昌江の性格の部分、これまで
彼の読みや掘り下げが足りなかったから見えなかったのが今突然生まれたそれ
ではない。そのことは内田自身にも適用できることであった。昌江や吉野に対する
態度がほぼ決定しているというが、昌江の告白を聞いてまず浮かんだのはこの女
とは別れなければならないという、途中の思考を省略した結論であったにもか
かわらず、平行して彼の胸に浮かんだのは、その場合の世間体に対する危惧であっ

た。離婚するとすれば、すくなくとも紹介者であり媒酌人である恩師に事態を打ちあけねばならない。この件に関しては内田に責任はないにもかかわらず、事情を説明するのに抵抗をかんじたのは、世間体に対する彼のみえ坊な気質のゆえであった。彼が頭脳の回転のはやい女性をおそれて結婚相手として選ばなかった理由はここにもあった。

彼が恩師にだけ打ちあけ、恩師は口をつぐんでいてくれても、いつかどこからか真相は洩れるであろう。その場合、こういう意味の被害者であることを世間に知られるのが、彼のみえ坊の気質には忍びがたい痛みになる。内田は自分の弱点を指摘されなければならなかった。内田の今までの生涯は順調に過ぎてきた。最も大きな事件は召集だったが、空襲をさえ経験しない南鮮にただで終戦になり、母校に残って順次に助教授にまで昇進した。生家の財産が俸給以上の生活を保証し、この湘南の海岸町の住居は三百坪の敷地と三十坪余りある建物とを持っている。父は健在だが、やがては遺産の保証もあった。一度も人生的事件に直面したことのない四十年であった。良識のある助教授として婦人雑誌の座談会に招かれ、読者の首肯する言葉を吐き、進歩的な意見を認められている。内田自身の世間体を顧慮するみえ坊な弱点に目をそらす習慣を持ったため、弱点についてはほとんど忘れていたのである。

鍛えられていないゆえの脆さが、これで暴露したのであった。内田は昌江に吉野とのペッティングの真似をさせたあと、必ずしも離婚しなくてもいいではないか、昌江を家事をさせる女中と思い、情欲を満たす商女と考えておいたっていいではないか？ 自分では自虐のつもりで考えた。しかし、これも事態を直視することを避けたがる理屈であり、功利慾さえ伴っている。昌江との閨房が彼の気持を弛緩させたのも事実だが。

×

内田は昌江を訊問することにモノメニアックになった。翌晩もそれをはじめた。しかし、遂次的に並べては冗が多いから、やはり五日間の問答を順序を立てて採録することにする。

「二回目のペッティングも吉野の強要が拒みきれなくなって、やってやったのか。」

「そうだわ。」

「一回目と同じ経過をたどったのか。やはり日本間にいたのか。」

「二回目は日本間に行かなかったわ。ここだったわ。」

「もう実績があるから、吉野は自信をもって求めたわけか。」

「そうね。前よりは余裕があったようだよ。」

「そのあとは、一回目と同じだな。」

「そうよ。」

「それでは三回目はどうだった？ 三回目は拒むことができたと言ったが、それはどういうわけだ？ 一回目も二回目も拒みきれなかったのに、どうして三回目は拒むことができたのだ？」

「英ちゃんが奥さんに誘惑されてだまされたいと言ったから、そんな卑怯なことというひと嫌いで突っぱねてやったの。」

「それで、おとなしく引きさがったというのか。」

「そうよ。」

この問答について、内田はこういうメモを書いた。

——吉野ガ誘惑サレダマサレタトイッタノハドウイウ意味カ？ ココニ重要ナポイントガアルト僕ハ神経ガスルドク働クノヲカンジタ。シカシ、コノコロニハ僕モズルクナッテ、性急ニ解明スルコトノ不利ヲ思イ、聞キ流シタゴトキフリヲシタ。質問ノ方法ヲ研究シナケレバナラナイ。

「そしてその後はどうだった？ 吉野がここを切りあげるまでの期間は？」

「あきらめたとみえて、要求しなくなったわ。」

「僕の留守中遊びに来なくなったのか。」

「来たことは来たけど、そういうことはなかったわ。」

内田はそのころ彼の在宅中にもたびたびやって来た吉野の態度を記憶の中に浮かべてみる。遊びに来はじめて最初のころのややぎこちない態度の期間のあとは、ずっと親しい態度の持ち主で、この海岸町から去る日まで変化をみせなかった。内田に対しては親愛と信頼とをそそぐ師として、顔があえば心からの笑顔をつくり、昌江に対しては先生の奥さんとしての親愛感をむけていた、少なくとも内田の面前では。内田は男女間の雰囲気に対し特に鋭敏な神経の所有者である自負はないが、しかし、手を握り合った最初から三回目のペッティングの拒絶にいたるまでの期間、吉野に対して一度も疑いの翳を感じたことがなかった。

これは内田の鈍さを示すのであろうか、それとも、また、吉野の演技力が内田の神経をうわまわっていたことになるのだろうか。演技とすれば、一等俳優も及ばぬ技巧ということになるが、あの親愛感のあふれる笑顔ははたして演技だけで

あったのか。内田と逢っているときは嘘でない親愛感がはたらき、昌江と二人きりになると別の人格の所有者になる、そういう使い分けがやすやすとできるのであるか。内田は解釈に苦しんだ。

それは昌江に対しても同じであった。昌江は忠実な主婦であり従順な家畜の目の消えた表情を見せたことがなかった。彼の感情の動きを気づかい、敢えてそむくところを内田は見なかったと記憶にきざんでいる。吉野にキスしペッティングをほどこしたのちも、夫婦の閨房の行為において彼の疑心を誘う態度の変化を内田は記憶のなかに残していない。これも演技であろうか、使いわけであるか。内田をとまどわせる。

しかも、それは半年以上の時日にわたったのだ。

吉野は遠くインドにあって、肉声のニュアンスによって探るわけに行かない。内田は昌江の説明によって、かの女及び吉野の心事を探ることにした。

「君は吉野とそういう関係にあったあいだ、僕に対してどう思っていたのだ？ 吉野とふたりで僕に秘密を守る約束をしたのか。」

「約束なんかしないわ。」

「約束はしないが、ひと言も吉野の強引な要求について僕に話さなかった。それはどういう気持だったのだ？」

「あなたには悪いと思っていたわ。でも英ちゃんにそこまで追いつめられたのだし、あたしはよくしてもらわなかったのですから、それほど自分が責められなかったのかわ。」

この説明は内田をおびやかした。それほど自分が責められなかった。そういう尺度が昌江にはあったのか。彼の質問に対して素直なまでの臆面のなさで応じたのは、この支柱がバックになっていたのか。内田はひとつの理解を獲得すると同時に、そういう支柱の存在に衝撃をうけねばならなかった。昌江の告白を聞いて以来彼を悩ましつづけていたかの女の不可解な言動の一端の理由はそこにあったのだ。昌江にとって、この尺度を支柱にすれば、従順な家畜の目と素直なまでの臆面なさが矛盾しないのかも知れない。昌江は自分の引いている線の限界を守ったことで、弁明の趣旨が立っているときめている。

内田は衝撃をうけると同時に、推しかえされた姿勢でたじろいだ。これは昌江独自の尺度であろうか、吉野の助言がそれをつくったのか、それとも、現在昌江や吉野の年代に共通の尺度なのか。もしこの最後のものであったとしたら、内田はすでに取り残された時代である。内田は用心ぶかくこのテーマをあとまわしに

することにした。正面からぶつかるには、用意がたりないとかんじ、側面から探りを入れた。

「吉野からそこまで追いつめられたというのは、どういう意味なのだ？ 吉野は三回目のペッティングのとき、奥さんに誘惑されてだまされたといったのじゃないか。それがほんとなら、君が追いつめられたというのは、逆ではないか。」

「だから、あたし、あなたみたいな卑怯な人大嫌いってやってやったのかわ。」

「そうすると、君の印象では君のほうが誘惑されたことになるのか。」

「そうなるわね。じわじわと追いつめられて、ペッティングしないわけに行かなくなったのだから、だまされたともいえるわ。あたしにはそんな気持なかったのだから。」

「じゃ、君は吉野が君に騙されたといったとき、こっちこそだまされたといってやったのか。」

「いかなかったわ。向こうが先にそんなこと云いだしたのに、あたしとしては、意地でもいいえなかったわ。」

「意地か。君には吉野を誘惑した意識はないのか。火燵の中で吉野の膝に手をかけたりしたのを、吉野は誘惑とうけとったのではないか。」

「そうかも知れない。でも、あたしにはそんな気持全然なかったわ。なんとなく肩だの膝だのにさわってみたくあるときあるわ。」

「どんなときだ？」

「ふっと淋しい気持になったりしたときよ。でも男の求めるものと女の求めるものとこんなにちがうのかってびっくりしたわ。あなただってそうかわ。なんとなくさわってみたくなくて手をかけると、すぐ性的な意味にとったりして、厭な気持のときがあるわ。こっちはちっとも性的な気持なんかないのに。」

「そうか、しかし、男とすれば女がそういう態度を見せれば、許す気があるのだと解釈しても、当然なのだ。女は言葉では意思表示をしない。そういう行動で意思表示するものなのだ。」

「そういうふうにするらしいわね。気をつけなければならないわ。」

話が一般論になりかかったので、内田は楔を打ちこんでみた。

「しかし、君はちょっと淋しい気分のときは、誰にでもそういうことをするのか。たとえばA君などにも。」

「Aさんにそんなことをしたことないわ。」

「じゃ、やはり特定の相手ということに、なるのだな。たとえば僕とか吉野とか。」

吉野以外の男にもそういうことをしたことがあるのか。つまり、膝にさわったり手を握ったりだ。」

「ないわ、そんなこと。」

「じゃ吉野だけなのだな。」

「……」

昌江はふとつまづいたような妙な顔をした。

「君は僕にはわるいと思ったといった。悪いと思いながらペッティングしていたのか。」

「そうじゃないわ。そのときは考えなかったわ。わたしは冷静でなんにもしてもらわなかったもの。あなたに責められたから、悪いことをしたと思いはじめたのだわ。」

こんどもまごついたような言い方だった。

「じゃ、現在はわるいことをしたと考えているのだな。」

「でもくりかえすけれど、あたしの方は興奮したりよくなったりしていないのだから、わるいとしたって十分ノーか二十分ノーぐらいとしか思えないわ。あなたがこんなに毎日責めるほどあなたが怒るとは思わなかったわ。」

×

内田は五日間でこれだけの資料を手に入れ、冒頭のメモを書いた。幾度か同じ質問を繰り返し順序を立てることができたのだが、昌江の供述はその日ごとにちがって内田を混乱させたばかりではなく、メモを見ながら考えると、目に見えて来ない空白がさらに悩ますばかりだった。しかし、メモをとったおかげで自分が何を知りたがっているかがすこしずつ明らかになった。今までモノメニアックに訊問した経験が、質問の要領を教えてくれ、どういう質問が昌江を刺戟するのもおぼろにわかった。

昌江は彼が責めているのを悟りはじめた。口を閉じる惧れもある。内田はしかしその悟ったところを衝いてみようと考えた。こうなれば、昌江の意識下の心情を引き出さねばならぬ。それによって、昌江を吉野との心情のつながりを発見しなければならないのだ。

六日目の晩、ウイスキーを飲みながらメモを出して、テーブルにおいた。

「君の説明を順序立てると、こういうことになる。ちがっていないな。」

「大体この通りだわ。」

「じゃ、別のことを訊く。二月の末吉野が来た日、君は吉野と格闘したといったが、格闘とはペッティングのことか。」

「ペッティングなんかしないわ。」

「じゃ、格闘とはどういうことだ？」

「英ちゃんを送っていくことになって、寝室で着がえているとはいって来たの。そしてあたしを抱いてキスしようとするから、拒絶したのよ。そのことよ。」

「そうか。そのことをもっと順を追って話してもらおう。あの日は僕は鎌倉へ行って友人と逗子まで歩き、日が暮れてから帰って来た。すると、君もそこから帰ってきたばかりでまだ帯だけ取った外出着でいた。そして、吉野がインドへ行く挨拶に来たので鎌倉へ電話をかけたばかりだったといった。君は吉野を小田原までドライブして帰って来たところだった。格闘という言葉は、風呂から上がってウイスキーを飲んでいるときだった。君はしきりに吉野についてしゃべりかけたが、僕は借りて来たヌーベル・バアグのポオノグラフィ読んでいたので、生返事きりしなかった。そのうち格闘という言葉が君の口から出たので、意味を考えることなく妙な言葉を使うものだとかんじ、まるで西部劇じゃないかなどとうわの空でいった。そうだったな。」

内田は妙な言葉を使うものだなと反射的にみかえしたときの昌江の顔を今でも目にうかべることができた。小鼻の両側からくちびるの両端に皺をきざんだ奇妙な薄ら笑いの広がっている顔だった。

「そうね。それで、何を話せばいいの？」

「吉野が来たところから小田原で別れるところまでだ。鎌倉へ電話をかけたのは一時ごろだな。吉野が来てすぐかけたのか。」

「すぐだわ。」

「それからどうした？」

「火燵でおしゃべりをしていたわ。」

「どんな話だ？」

「インドの話や昔のこのへんのことよ。そのうちにインドへ行けばすくなくとも二年はこのへんの景色をみるができないから、海岸に行ってみようということになったのだわ。だから、あたしが着替をするために寝室に行ったら、あとから英ちゃんはいってきたのよ。」

「着替をしている最中か。」

「最中だってもう着替えていたわ。帯だけはまだ締めていなかったけれど。」

「それで、どうした？」

「いきなり英ちゃんが抱きしめてきて、今でも奥さんが好きだと云いながらキスしようとしたの。あたし拒んだわ。」

「そうしたら、吉野はどうした？」

「だって、とっても力が強いんだもの。押し倒されちゃったわ。」

「ストールによ、洋服ダンスのそばの。」

「それでペッティングしようとしたのか。」

「押し倒されてキスはされたけれど、低いストールに倒れたからできなかったわ。」

「ということはペッティングしようとしたのだな。」

「よくわからないけれど。」

「手を裾に入れたのだろう。届かなかったただけだろう。」

「届かなかったわ。」

「それならしようとしたのじゃないか。」

「でも、させなかったわ。」

「それから、どうした？」

「出て行って頂戴っていったら、出て行ったわ。あたしも帯をしめて出て行ったら、火燵にはいっていたわ。火燵にはいって仰向けにねそべって、背中が痛いつていったから、乱暴するからよって云いながら、少し心配になってそばへ行ってみたわ。そしたら、それはあたしをそばへ近寄せる口実だったのだわ。あたしの手を握ってお別れにもう一度ペッティングしてくれないかというの。」

「それでしてやったのか。」

「とんでもない、今さら何をいうのってことわったわ。」

「それで、どうした？」

「ことわったら、おとなしく聞き入れたわ。そのうちに海岸を歩くより前から一度そう思っていたドライブをしてみたいと云い出して、車を呼んだわ。横浜で乗るかわりに、小田原で乗ることになればドライブウェイを見られるからって。」

「それで小田原へ行ったのか。小田原でどうした？」

「何かかるい食事をとって探したけれど適当な店がないから、駅前でコーヒーを飲みながらおしゃべりをしたわ。コーヒー代はあたしが払ったわ。」

「何時の汽車に乗ったのだ？」

「五時十分の準急よ。」

「それだけか。ほかになんにもなかったのか。」

「なかったわ、絶対に。おしゃべりしただけだわ。」

「しかし、吉野がよくおとなしく君の拒絶をうけいれたものだな。寝室で君がどうにもならないほどの力で抱きしめ、キスをしてペッティングしようとしたのなら、興奮していたわけじゃないか。」

「キスなんて、ちょっとくちびるが触れた程度だわ。寝室を出て行ってからはそんなに興奮していなかったわ。ペッティングしてくれといったのも、冗談半分みたいによ。」

このことについての内田のメモはここでは省略しておく。

「そのときのことはわかった。それでは去年の秋やはり僕の留守に来たことがあった。大阪から出張で来たときのことだ。あのときはどうだった？」

「あのときはなんでもなかったわ。普通のおしゃべりをしただけだったわ。」

「そのくせ、こんどは君を抱いてキスをし、ペッティングを求めたのはどういうわけだ？」

「インドへ行けばすくなくとも二年は帰ってこられないし、どんな事故が起こるかもわからないって感傷的になっていたところもあったわ。そのためではないかと思うわ。」

「そういう心理か。」

去年の秋、吉野が来たときは留守にしたが、その二日のちに内田は吉野に逢っている。在京県人会の席上で、出張中を利用して出席した吉野は、内田の顔を見ると遠くから笑顔をつくって彼の前に来た。その親愛感の溢れる顔はまだ目に残っている。そのときふと彼の年齢を訊き、内田はでは来年は僕の結婚した年齢になる、もうはやいとはいえないぜといった。

「僕もそろそろ年貢の収めどきかと考えています。」

吉野は悪びれず答えたが、ことしの正月になって結婚通知と披露宴招待状が来た。一月中旬、内田は恰度その日京都で講演の約束があったので、講演をすますと披露宴の会場である大阪のホテルへ駆けつけ、メン・テーブルに据えられて、吉野の才気をいくらか誇大に力説して祝辞にかえた。帰宅してから昌江を次のような会話を交えたのを、内田はおぼえている。

「どんなお嫁さんでした？ 英ちゃん嬉しそうだった？」

「そりゃ嬉しいだろうが、そういう顔もできないものさ。可愛い花嫁さんだった。

ラジオ・タレントだったそうだよ。」

「逢ってみたいわ。招待状あなた宛だけだったので、あたしが怒っていると伝えてくださった？　なんていっていた？」

「どうせおいで願えないと思ったからださ。君だけではなく僕もだ。花嫁さんには逢えるぜ。東京本社へ挨拶かたがたこっちへ旅行に出るのだそうだ。是非寄りたまえとっておいた。」

内田はそのときの昌江の表情をおぼえていないが、三日後彼の学校のない日の朝、新婚夫婦が不意討に訪ねてきたとき、こんなことがあった。挨拶がすむかすまぬうちに昌江が吉野に向かっていった。

「英ちゃん、ダメじゃないの。前ぶれしてくれなくちゃ。うちでは新婚のお客さまには鶏の丸焼きこしらえてさしあげること、忘れたの？　今日だと思わないから、なんにも支度ができていないわ。でも大いそぎではじめるから手つだってね。」

「やあ、鶏の丸焼きは誘惑的だなあ。しかし、ダメなんだ。午の横浜駅の汽車にのらなければならぬんです。」

「ひどいわ、そんなの。じゃいくらも時間がないじゃないの。失礼ね。」

「おい、そんなことしているうちに時間がたつ。とにかくウイスキーで祝杯をげよう。早く持って来たまえ。」

テーブルにはウイスキーの用意ができ、グラスをあげて祝意を表すると、昌江の姿が消え、間もなくきっちりと和服に着がえて出て来た指に翡翠の指輪があった。

吉野夫婦を玄関に送り出したあと、内田はすぐ昌江をたしなめた。

「学生時代の独身者どちがうのだから、あんまり馴れ馴れしい態度を示さない方がいいね。新婦が気を悪くするぜ。それから、翡翠の指輪も感心しなかったな。新婦は金の結婚指輪つきりはめてなかったじゃないか。」

「あら、あたしとしては、サアヴィスのつもりだったわ。いつだったか英ちゃんがこの指輪をはめている奥さんの指はとても綺麗だってほめたことがあるのだから。あなたこそガウンのままで失礼だと思いいにならなかった？」

×

次の日、内田は新学年の打ち合わせ会議に出席するため東京へ出た。湘南電車の車中、吉野夫婦が来たときの昌江の言動をもう一度くりかえして考えてみた。昌江はほとんど吉野の新妻を無視して吉野に馴れ馴れしい態度を示し、吉野はこ

だまのように応じた。昌江はまた盛装に近い服装に改め、吉野の新妻のほそい金の結婚指輪に対抗するみたいに翡翠の指輪をはめてきた。

それがそのあと先日来たときの行動を誘い出したのであろうか。

昌江と吉野のつながりは、五年前だけで終わっていなかった。

内田は、五年前にふたりから裏切られただけではなく、五年間裏切りつづけられ、現在尚裏切られていることを知らねばならなかった。

もう四月にはいっていて、先週東京へ出たときにくらべると、窓そとの風景は色彩をかえている。内田は日曜日の夜昌江から吉野とのことを聞いて以来、一度も家のそとへ出ていない。窓そとへ目をやると光線が痛く沁みて来て、内田は自分が疲れていることを知った。結婚以来十年間往復している沿線が、彼にとって今日別の風景になった。車中を見まわすと車室には彼よりも年長の男たちがゆったりと席を占めていた。みんな中流以上の乗客で、生活に自信のある態度の持ち主ばかりだった。

このおちついている連中のなかに、自分のような立場におかれた経験の持ち主がいるであろうか。いるとすれば、どういう解決方法をとったろう。一刀両断という形容のごとく、長く悩むことなく妻を追い出したであろうか。あるいは、世間にありがちな過失として、太っ腹に忘れ去ったであろうか。内田は自分にはそんな豪傑ぶった態度はとれないと思った。そういう太い神経はもっていない自覚があった。

しかし、ちがう次元でおこった裏切りのために打ちのめされてしまうほどの弱い神経の持ち主でもないぞと自分をかえりみた。そうだ。誰がそんな負け犬になってたまるものか。怒りが燃えてきた。

学校の会議の途中に電話があつて、いつか座談会に出た婦人雑誌の婦人記者が面会を申しこんで来た。湘南の家へ電話をかけて、学校にしていることを知ったのだということを聞いているうちに、内田の胸にひらめくものがあつた、会議がおわってから、銀座の喫茶店で逢う約束をした。

喫茶店で持ち出されたのは、本年度就職した大学卒業のB・Gたちに職場の感想を聞く座談会とのことで、内田はそれを承認してから彼の持って来た質問を出した。もちろんひとごととして、昌江の十分か二十文分の一の責めしかかんじないこと、及びその状態にあつた当時はそれさえ感じなかったことについて、昌江とほぼ同時代にある婦人記者の意見を求めた。

「そういう考え方があなたたちの年代にはあるのですか。知人から相談をうけた

がなんとも返事の言葉がなかったのですね。ご教示いただきたいものです。」

「なんだか奇妙はお話ですね。もっと詳しくご存知のことみんなおっしゃってみてくださいませんか。」

婦人記者は興味をおぼえた表情で、乗り出した。内田はこの問題が明らかになった場合、この婦人記者もニウスとして取りあげるだろうから考えながら、客観的に昌江の支柱になっている尺度を説明した。熱心に聞いていた婦人記者は、そこまで来ると笑い出した。

「そんな考え方なんて、あたしたちの年代にだって存在しませんわ。それは詭弁じゃありません？」

「それは僕もかんじて友人に問いただしたのだが、詭弁の使えるような頭の持ち主ではない、本気でそう思っているとしたら思えない、そうでなければペッティングの状況まですらすらと説明する筈がないと思うといわれて、もはや解説もアドヴァイスも放棄してしまったのです。」

「その奥さまを先生も御存知ですか？」

「逢ったことはありますが、深くは知りません。」

「お逢いしてみたいわ。もし詭弁でないとしたら興味があります。」

「まあ、それは許してやってください。それと同時に、こんどは相手の男だが、こういう男をどう思いますか？」

「これは問題になりません。ひと言でいえば、泥棒猫ね。」

「愛情を持っても？」

「愛情にはモラルとエチケットが大事ですわ。同情はできません、絶対に。」

婦人記者と別れた内田はその歯切れのいい裁断によって胸のなか洗われた。婦人記者としては一般論としてきりいえないのは当然で、それは内田のなかで幾度もくりかえされた論法だが、他人から聞けば新鮮な風のように沁みこんで来る。愛情のモラルとエチケットはむしろ内田のいいそうな言葉だが、泥棒猫という辛辣な決めつけは彼に媚びる十分な響きを持っていた。内田はその足で彼の著作を出す出版社にまわり、再校中のゲラ刷りをもう一度しらべ直す希望を申し出た。戦後のイギリス文学をテーマに取り上げたから、当然セックスの問題に触れている。その部分についてなまぬるい批判きりしていないのをもどかしくかんじたのだ。その部分は机上の遊戯にすぎない。新しい目で見直さねばならぬ。この評論は恩師とも相談の上で取り上げた彼の学位請求論文だった。

出版社の編集長と夕食を共にし酒をのみながら、内田は希望を述べ新しい掘り

下げ新しい切り込みをしゃべった。

「今になってこんな修正をするのは恥ずかしいし君のほうでも迷惑と思うが、このわがままはぜひ通してもらいたいのだ。」

「迷惑ということはありません。先生の今度の意見には血がかよっていると思います。あの部分は全部組みかえても結構です。思いっきりおやりになってください。」

内田の意気込みに対して、編集長はむしろ激励するように承諾してくれた。新橋駅からおそい終電車に乗った内田は手帳に鉛筆でメモを書いた。

——なぜ僕ハボクノナカニタギッテイル憎シミヲ直視ショウトシナカッタノカ。何ヲオソレテイタノカ。憎シミヲ直視スルコトニヨッテ起ル感情ノ激動ヲ、ソシテ、ソノ激動ニヨッテ荒ビタ行為ニオチイルノヲオソレタノカ。ソレモアル。シカシ、僕ノナカニ巢食ッテイル虚栄心ガソレヲ妨ゲタトイッタホウガ真実デアルコトヲ、今ヤ悟ッタ。吉野ハ僕ガ若干ナリト世話ヲシタ学生デアリ、対等ノ立場ニ立ツコトヲ否ム心持ガ僕ノナカニアッタ。吉野ゴトキヲ相手ニ惑乱スルノヲ恥辱ト思フ虚栄心デアル。ガ、ソレハ誤謬デアリ、ソシテ口実ニスル怯懦ナ精神デアッタ。僕ガ彼ノ被害者デアリ彼ガ加害者デアル事実ヲ正視スレバ、モハヤ教師対学生ノ関係ハ消失シ、対等ノ場ニ立ツモノトミトメナケレバナラヌ。僕ハ彼ニ嫉妬心ヲカキタセラレタカ。ソレモアロウ。シカシ、彼ニ対スル憎シミハソレ以上ニ彼ガ加害者デアリ、シカモ恬然ト僕ニ対シタ態度ニアル。裏切りニ対スル憎シミノサラニ数倍スル憎シミハ、ソノ裏切りガ今尚ツツイテイルニモカカワラズ、僕ヲ恬然トシテダマシツツケタコトニアル。泥棒猫メ。対等ノ場ニ立ッテギョットイワセテヤラネバナラヌ。

昌江ニ対シテモ同断。僕ガ昌江ヲ対等ノ場ニ置カナカッタノハ、カノ女ノ知能程度ガハルカニ劣ルノデソノ氣ニナレナカッタガ、コノコトニ僕ハ責メヲ感じナイ。日常生活ニツイテハ十分対等ノ立場ヲ尊重シタツモリダガ根本的ニハカノ女ヲ僕ノ掌ノ上ノ範圍デノミ生活スルモノト見テイタノデアル。コンドノ告白以来ノ無知無恥ヲミレバ、僕ノ今マデノソノヨウナ態度ヲ是認トマデハイワナイニシテモ否定スルワケニイカヌ。シカシ、カノ女モ五年間裏切りヲツツケテイル。イカニ否定ショウトモ、アルイハ裏切りノ限度ヲ希薄ニスベク言ヲ弄シテモ、ソレガ裏切りデアルコトハ否定デキヌデハナイカ。裏切ルコトノデキル女ヲ知能程度ガ低イトイウ理由デ寛容ナ態度ヲモッテ対スルナドハ滑稽ナ負けオシミダ。昌江トモ対等ノ場ニ立ツコトヲ、僕ハ自分ニ命ジル。

事態ヲ正視スルコトニ怯懦ナルナ。世間体ヤ日常ノ便宜ニ氣持ヲサラワレタコトヲ恥ジル。

内田は帰りにまわり道をして海に出た。月のない夜で海あかりがおしよせて来る白い波がしらの長くひろがった線を、くりかえし浮かびあがらせた。内田は、少年のころ海を愛し、夜ふけの海にひとり出て故のない孤独感を噛みしめた。二十五年も前の故郷の熊野の海である。孤独感少年の精神をひさしめ、未来へ向ってのはてしない空想を羽ばたかせた。一日一日、時々刻々が未来への生命感を充実させた。ひろい砂浜にたって押しよせては碎け去る波がしらをみているうちに、そのころの柔軟な精神がよみがえって来た。あのころは未知の未来への高い渴仰があった。何があらわれて来るか測り知れない未来であった。現在はどうだ。日々マンネリズムのコースに乗って、妥協という言葉の存在に目をつぶっている。こんどおこった事態は大きな打撃を与えたが、負け犬になってはならぬ。忘れていた柔軟な精神をとりもどせ。四十一年の生涯にはじめておそって来たカストロフを大事に取りあつかえ。内田は幾度も大きく深呼吸をくりかえしているうちに、張った胸のなかに勇気が満ちて来る自覚があった。未知の未来に対する怯えと不安とは去り、新しい渴仰が生まれた。

×

その夜は何も話さずに寝、翌日も沈黙をつづけていると、昌江は彼に相談することなく旅行の支度にとりかかった。その翌月曜日、以前アドバイスを受けたことのある音響関係の電機製作所の掛川工場へ招待されていたのだ。英語のフォネチックのアドバイスで、内田のほかに同じ関係の教授や助教授が五人一緒に行くことになっている。工場見学といっても慰労が主になっていて、夫妻に宛てて招待状が来ていた。昌江がかの女の分も支度しているのを見て、こんな場合一緒に行くつもりかと顔を見直したが、あるいはこれが最後の旅行になるかもしれないと思いかえし、口を出さなかった。

夜になると、内田はウイスキーを飲みながら、訊問をはじめた。負け犬にならないため、昌江と吉野についての事実を全部知っておく必要をもつとつよくかんじはじめていた。

「君は現在吉野に対してどういう気持ちを持っているのだ？」

「あんな卑怯なひと嫌いだよ。」

「それでは彼が帰って来て挨拶に来た場合、君はどうするつもりだ？ 二年後とはかぎらない。社内で短期間帰って来る場合は、半年先かひと月先かかわからないのだ。そのときどうするつもりだ？」

「どうするつもりって？」

「過去のことを僕が聞いたと知らなければ、挨拶に来るだろう、その時のことだ。出発のとき来たつづきの気持を持ってやってくる、そういう気持の吉野と顔を合わせた時のことだ。」

「あたし、あなたの前でもいいし、あなたが厭ならあなたのいないところで、あなたにしゃべったというわ。そして、今後ああいうことをしないでくれってことわるわ。」

「それでも尚君を好きだといったら、どうするつもりだ？」

「もううちには来ないでくれっていうわ。」

「ということは、吉野とのことを後悔しているという意味か。」

「後悔というより、あたしにあんなことをさせるところまで追いつめて、あなたをこんなに苦しめたひとが憎らしいわ。」

「僕を苦しめたのは吉野だけか。君は僕を苦しめたとは考えていないのか。」

「それは申しわけないと思っているわ。でも、あなたがこんなに苦しむとは思っていなかったわ。」

「では、僕が苦しまなかったなら、わるいことをしたとはおもわなかったわけか。」

「そんなことないわ。去年の秋来たときあたりから、あなたにすまないと思いはじめていたわ。」

「では、去年の秋来たときも何かあったのか。」

「……」

「真実を話してもらおう。ペッティングをしたのか。」

「ペッティングなんかしなかったわ。」

「じゃ、キスぐらいか。」

「帰るとき玄関でいきなり抱きついてキスをしようとしたから拒んだわ。」

「拒むだけですんだのか。」

「だって、とてもつよい力で抱きしめたので、逃げられなかったのだから。でも、ちょっとくちびるがさわったぐらいだったわ。」

「ペッティングしてくれとはいわなかったのか。君のをペッティングしようとしなかったのか。」

「しようとしたけれど、させなかったわ。」

「吉野はやはり興奮していたのだな。興奮していることがわかったか。」

「興奮はしていたわ。」

「どういうことでそれがわかったのか。」

「だって、ぎゅっと抱きついているから、あすこがあたしのからだにさわったの
だもの。」

「つまり、おおきくなっていたのだな。」

「……」

無言の肯定。

「それで僕に対してすまないとかんじだしたのか。」

「それもあるけれど、もっとすまないとかんじるようになったのは、インドへ行く
ときまったときかされたからだわ。」

「それはどういう意味だ？」

「これで二年逢えないと思うと、なんだか気持の上で深入りしそうな不安がおそ
って来たの。そんな気持になるのはあなたを裏切ることになると思って苦しくな
って来たわ。だから、あなたに告白してしまえば、そういう気持を喰いとめるこ
とができると考えはじめたの。そうでないと、帰ってきたとき変なことになるか
も知れない、そうなってはいけないと考えて、告白したくなったのだわ。」

「しかし、せんだって吉野のことを口に出したのは、そういう気持からではなか
った。僕のつくり話に対抗して、のろけをいっている甘ったるい声でしやべった
ではないか。」

「あのときはそうだったわ。癪にさわったのだもの。あすこを口でペッティング
するのは、あたしにだけだと思っていたら、そんな昔とっくにやっていらしたと
聞いて、むかむかっとしたのだわ。」

「そんなに癪にさわったのか。」

「そればかりではないわ。あの前英ちゃんがお嫁さんを連れて来たとき、そのあ
とで着物を着替えたのがどうか、指環をはめたのがどうか、変な非難をされ
たのが癪にさわっていたわ。」

「そうか。それで、癪にさったのはそれだけか。」

「もっとあるわ。おとといあたしが山梨へ行ったとき、東京のホテルに泊まって
どうかというスチュワデス崩れの女から手紙をよこしたときだって、そうだわ。
大抵のことなんでもおしゃべりになるのに、あの女についてはひと言もおしゃ

らなかったから、疑うのは当然だわ。」

「あの女のことはあとで説明して、君も納得したはずじゃないか。」

「納得はしたわ。でも、不愉快だったわ。」

「随分はげしくぎゃんぎゃん僕をやっつけたが、君はそれよりずっと前に吉野とそういうことをしていた。自分のことを棚に上げて平気だったのか。」

「そんなこと、あのころはもう忘れていたわ。あたしにとって、その程度の浅い関心きりなかったのだわ。」

「君はいま翡翠の指環のことを口にしたが、吉野とふたりきりのときはあの指環をはめる習慣なのか。」

「……」

無言の肯定。

「ペッティングしたときも、はめていたのか。」

「忘れたわ。そんな昔のこと。」

「君はすぐ忘れたとかわからないとかいうが、吉野とのことは君の人生のなかで重大事件だとは思わないのか。」

「いまになってあなたに責められればそう思うけれど、そのときはそれほどとは思わなかったわ。あたしはなんにもしてもらわないのだから。」

内田は翌日渋谷へ向かう車中、こういうメモを書いた。

——昌江ノ返答ハ相変ラズ矛盾ダラケダガ、カノ女ニトッテハソレダケガ真実ナノダロウ。矛盾スルノハ詭弁ナドデハナクテ、自己防衛本能ガソレヲ誘イ自身真実ダト思イコンデイルノダト見タ方ガ正シヨウデアル。防衛本能ハデキルダケ自分ノ罪ヲ軽ク見タガリ、ソノヨウニウコトニナルガ、一方デハアンナヒト憎ラシイトと罵リナガラ、気持ノ傾斜ノ深マッタコトヲ告白シテシマウノダ。五年前ニ苦シンダトスレバ罪ヲ深くミトメナケレバナラナイカラ、ソウハ言イタクナイ。ムカシノコトハ忘レテシマッタイウノモソノ本能ノコエダガ、問イツメテ行クトコレモ矛盾ダラケナガラ相当ニデテイルズマデ説明スルノガソノ証左デアル。今トシテ僕ガ一番知リタイノハ、具体的事実ヨリモ昌江ト吉野ノ精神的ツナガリノ深淺ニナッタ。コレハアクマデ追求シ真実ヲツカマネバナラス。

その日一行は伊香保に一泊、翌日一行の大部分は帰京したが、内田は親しい一組の仲間夫妻を誘い、水上に向かった。水上温泉に吉野の同級生で、彼の療養時代たびたび見舞がてら遊びに来、内田の家にも訪ねて来た山西が若主人として経営している旅館があるのを思い出したのだ。

夕食後、内田は彼の部屋でおしゃべりをしている友人にことわって、山西に逢いに行き、旅館内に設備してあるバアへ誘ってウイスキーを飲みはじめた。

話題が当然吉野に移ると、

「結婚披露に出たよ。偶然京都へ行った日だったのでね。そのインドへ行くについて挨拶に来たが、僕は留守でね。留守といえ、去年の秋来たときも逢えなかった。しかし、元気でやっているようだね。」

「吉野のやつ、お電話してから伺えばいいのに。彼は先生に甘えすぎていますよ。」

山西の語気は、何かニュアンスがあった。

内田はそこに糸口をつかまえた。

「そういえば、山西君、五年前に吉野は僕の女房を好きになったようだが、そんな話君にしたことなかったかい？」

「やあ、そんなこととちょっと聞いたことがあったような気がします。」

「どの程度までしゃべったろう？ いいのだよ。僕は全部知っているのだから。ペッティングのはなしも聞いたかい？」

「……」

温厚な山西は言葉に出して肯定するわけに行かない困った顔で、否定をしなかった。しかし、内田にとっては、そこまでで十分だった。これ以上は口をひらかないであろう山西につらい想いをさせては、気の毒でもある。さりげなく話題をかえてしばらくすると、昌江がバアへはいつて来た。

「どうしたのだ？ 君まで抜け出しては失礼じゃないか。」

「もうお部屋へお引きとりになったのよ。」

「さあ、奥さんもどうぞ。」

旅館の若主人らしくないぎこちない態度で、山西は席をゆずり、昌江にハイボールを命じた。

×

部屋へもどると、昌江は内田の寝床へすべりこんで来た。

「山西さんの旅館思ったよりずっといいわ。ここならおちつけるわ。」

内田は昌江の求めるペッティングに応じ、興奮して来るのを待っていった。

「吉野は五年前山西に君のことをしゃべったそう。こういうことをしたことも。」

「あら、英ちゃんしゃべったの？ バカね。」

ひどく酔っていてもいたが、内田の言葉は昌江の情念に水を差さなかった。内田は興奮の度がたかまって来る昌江を、実験的な気持ちで扱った。

翌朝、おそい朝食の席で友人夫妻も一緒にビールを飲んでいる途中、女中が襖をあけて奥さまちょつと昌江を呼んだ。昌江は思いつめた必死とも言いたい表情で、ことわりなしに出て行った。そして朝食がおわり、出発予定の時刻がせまっても、もどって来なかった。

「仕様がな。久しぶりなので、山西と話しこんでいるのだろう。僕はすこし眠い。残らせてもらおうか。」

女中に次の間に寝床を敷くよう命じ、玄関まで友人夫妻を送って帰っても、昌江はまだもどって来ていなかった。内田は寝床に仰向けに寝てタバコを喫いながら、昌江が出て行ったとき彼をおそって来た感情を噛みしめた。

昌江が山西に逢いに行ったことは、かの女が席を立った瞬間に悟ることができた。いつ女中に山西の都合を訊かせたについては勘がはたらなかったが、吉野について訊くのが目的であることも、同じ瞬間に悟ることができた。そのとき内田の胸のなかに盛りあがって来た感情は、この事態がはじまって以来はじめての嫉妬であった。奇妙なことだが、昌江の告白を聞いて以後彼を揺すぶっていたのは、被侵害感であり被疎外感の不快な荒波だけで、嫉妬という感情は希薄というよりほとんどなかった。

それが不意に呼びさまされたのは、部屋を出て行くときの昌江の硬ばった表情のためで、この場合内田にとっては、山西は吉野の代人であった。今まで嫉妬がおそって来なかったのは、ほかに理由もあろうけれど、吉野が遠くインドにいる距離感のためにちがいなかった。昌江の告白によれば、心持はずっとつづいてるとみとめなければならないが、現実の事件としてその実感がうすかったからかも知れなかった。昌江が山西に逢いに行ったことが、生ま生ましい現実感を訴えて来ないのである。向うで昌江が対談しているのは山西ではなくて、吉野だった。

それからまたしばらくたって、昌江が帰って来た。

「あら、おやすみの？」

「随分ゆっくりじゃないか。予定の時間になったから、先に帰ってもらった。」

「そんなにいたかしら。」

「山西に何を訊いて来たのだ？」

「あなたが英ちゃんのことおっしゃったから、どんなことをいったか訊きに行っ

たのよ」

「山西はなんといっていた？」

「吉野は嘘つきでつくり話が上手だからって。」

「それから？」

「それだけだわ。」

「それにしても随分長時間にわたったじゃないか。いや、そんなことはどうでもいい。話がある。」

内田は起き直った。「——君の吉野に対する気持ちがわかった。君は吉野が山西に君のことをどんなふうにしたか訊きに行ったのだろう？」

「どんな気持ちだったか知らなければならなかったのだわ。それだけだわ。厭だわ、そんな怖い顔。」

「君は現在でも吉野に関心を持っている。吉野の気持ちが知りたいということは、君の気持ちを十分説明していると思う。僕は吉野に深い関心を持っている君とは一緒に暮らせない。別れよう。」

「え？」

昌江は耳を疑う表情で内田の顔を見かえした。大きくみはった目は従順な家畜のそれになり、本気でとってはいない素直なまでの厚かましい見返しであった。内田はやりきれない苛立たしさにおそわれ、つよい光を放つ目でにらんだ。通じたとみえて、昌江の顔いろが変わった。

「厭よ。厭よ、別れるなんて。許してください。お願い。」

声がふるえ、すりよって膝に手をかけ、内田の顔を見上げた目から涙の玉がしたたりおちた。

「とにかく、帰ろう。ここでこの話をするのは不適當だ。」

叫び声をあげそうな昌江の口を封じて、内田は立ちあがった。

湘南の海岸町へ帰りつくまで、事務的な会話をふたつ三つくらいきりかわさなかった内田は、ポストから持って来た新聞や郵便をホールのソファに掛けて調べだした。

「お風呂におはいいになりますか？」

「今朝はいったばかりじゃないか。」

「ウイスキーお飲みになりますか？」

「うるさいな。話しかけないでくれ。」

内田は郵便から顔をあげなかったが、昌江が従順な家畜の目になっているのが

わかった。昌江はテーブルの上にウイスキーの用意をして、寝室で着替えをして来た。忠実すぎるほど内田に気を使っているのもわかった。が、煩わしかった。焦点のはずれている気づかいは、苛立たせるのに役立つばかりだった。内田はことさらに固く口を閉じつづけた。

「許してください。別れるなんて厭です。」

不意に内田の前の絨毯に正座して、膝に顔を伏せて悲鳴をあげた。

「うるさいな。うるさくしないでくれといっているのが、わからないのか。」

「だって、別れるなんておっしゃるのだから。厭です。許してください。」

涙がズボンを濡らしているのがわかって、内田は眉をしかめた。

「許せゆるせと君はいつているが、何を許してもらおうというのだ？ 正直に言えば、僕は許すとか許さないとかいう気持ちにさえなっていない。僕は君と吉野に五年間だまされて来た。五年間だましつづけることのできる君は、僕にとって怖い存在だ。僕は君を知っていると思っていたが、それはうぬぼれにすぎなかったことがわかった。君は許せというが、そんなに簡単に許してもらえることだと考えているのか。」

「だから、あたしが悪かったんです。」

「君と結婚してから十年を越えた。その半分の五年間だまされていたと思うと、屈辱は忍びがたい。五年前に僕は助教授になり、君も喜んだはずだ。何が不満で吉野を選んだのだろうか？ 僕は自信を失う。その後の五年間も僕は日の当たる生活をして来たと考えていた。それが君と吉野のために、まっくろに塗りつぶされてしまったのだ。僕自身はなんにも知らぬうちに。何が不満だったのだろうか？ せんだって君は僕が君の遊び相手にならなかったことを、不満の理由にあげた。そうかも知れない。しかし、新婚半年や一年ならともかく、夫婦は遊び相手同士ではないのではないのか。君は吉野がいい話し相手だったからといった。彼の才気をもってすれば、充分いい話し相手になるだろう。その上、あのころの吉野は暇がありあまっていた。君の遊び相手になることは、彼も遊び相手をみつけたことになる。しかし、良人のある女の遊び相手というのには、おのずから限界があるのではないのか。ペッティングまで行けば、もう遊び相手の限界ではあるまい。それが僕を裏切り僕を傷つけるとは考えなかったのだろうか。」

「考えました。だから、苦しんでいたのです。」

「僕には苦しんでいたとは見えなかった。すくなくとも、僕の神経にはそういう響きは伝わって来なかった。君は裏切りをみとめたが、それが吉野と肉体関係を結

ばなかったから、罪は十分の一か二十分の一しかかんじられないといった。それも僕が怒りはじめてからそういう自覚を持ったともいった。僕にはその心理がわからない。そういう神経の持主と一緒に生活するのは、堪えがたいのだ。やはり、別れた方がほんとうだと思う。君は君の考え方で新しい生活を出発すればいいし、僕は僕なりに考える。」

「どうしても、ダメなの？」

従順な家畜の目で内田をみつめ、みつめている目からまたしても内田を苛立たせる涙が溢れ出た。

×

——僕ハ昌江ヲ対等ニ扱ウコトヲ自分ニ命ジタガ、ソレガ予期ヲハルカニ越エル困難デアルコトヲ知ツタ。対等ノ立場ニ立テバ、ボクハ鼻ズラヲトッテ引キマワサレテイルカノゴトク翻弄サレテシマウノダ。昌江ニソノナ意識モ能力モナイコトガワカッテイナガラ、ソノ矛盾ダラケノ説明ガ期セズシテソウイウ結果ヲモタラスノdeal。コノ自分デツクッタ掟ガ不合理トワカッタカラニハ、ヤメネバナラス。シカシ、ソレニシテモ、別レルト言イ出シタトキノ昌江ノ驚キハ僕ヲトマドワセタ。アレダケ責メラレテイナガラ、別レルコトヲ一度モ考エテイナカッタ心理ノ根ハドコニアルノダロウカ。ヤハリ、アノ不思議ナ尺度ガ支エニナッテイルノカ。アレハ自己防衛本能ノイワセタモノト解釈シタノハ認識ヲ欠クノデアロウカ。許セト簡単ニイウ。許シテクダサイト哀願スレバソウカト答エルノヲ期待シテイルトオボシキ心理モ、トリアツカウニ困難ナ幼稚サダ。シカシ、何ヲ許セトイウツモリダッタノダロウ。ソレヲ訊カナカッタ僕ノ解釈ト昌江ノイウ内容トニ喰イチガイガアルノデハアルマイカ。タシカメテミナケレバナラス。ガ、ソノ前ニ僕自身ノ気持ヲタシカメテオク必要ガアル。何ガ許セ何ガ許セナイノカ。カリニ全面的ニ許ストシタ場合、許スタメノ心証ハ何デアロウカ。被侵害感、被疎外感、裏切り、受ケタ傷、五年間ノ生活ノ裏返し、ソノ根本ハ何カ。フタツノ場合ヲ考エテミル。昌江ト吉野トノ心持ノ交流ガ一筋ノモノdealカ、アルイハ浮気心悪戯心カラノモノdealカ。煮ツメテミルト、最モ知リタイノガコノ点ニアルコトガワカッテ来タ現在、僕ハソノイズレヲ望ンデイルノダロウカ。一筋ノモノデアレバコレヲ尊重スベキdealカ。ソレトモ、モット傷ツケラレ屈辱ヲカンジルノカ。マダ、悪戯心デハジマ

り、昌江ガ後悔シテイルトスレバ忘レ去ル雅量ヲ僕ハ持テルノカ。悪戯心ナラバモット僕ノソソザイガ無視サレタコトニナルノカ。コノ問題ニナレバ、混乱シテイルノハ昌江デハナクテ僕ノホウデアルガ、ソレナラバ吉野ハドウデアルカ。一筋ノ心持ガアッテ尚且僕ニ対スル遠慮ノタメ限界ヲキメタノカ。ソレトモ、婦人記者ガ一言ノモトニキメツケタ泥棒猫ノ心事デアッタカ。泥棒猫トイウ言葉ヲ聞イタトキ、僕ハ僕ノ胸ノウチヲ代弁シテクレタト痛快ナ気持ヲアジワッタガ、ソレハアマリニモ感情的デアリスギタノカ。僕ハコレヲ究明シタイ。

その晩、内田は昌江にいった。

「僕は吉野に手紙を出す。いいね？」

「……」

なぜそんな断りをいうのかと訝りの目で、うなずいた。

「手紙の基礎は、君の話にある。いいね？ まちがっている点を思い出したら、訂正してもらいたい。まちがった基礎の手紙は、みんなが迷惑する。嘘はないね？」

「嘘も隠していることもないわ。全部話してしまったわ。」

「じゃ、意見をまとめるために訊く。五年前君が吉野のことを僕にしゃべらなかったのは、吉野をかばう気持からだだったとみとめるな。」

「あのころの英ちゃんは、あなたから見はなされては困るだろうと思ったわ。そのころは、英ちゃんにも幾度もいったわ。そんなことをしては大変なことになる、内田とあたしとどっちが大事かって。」

「かばったことをみとめるなら、次の質問に移る。君と吉野とのあいだに流れた気持は、本気な一筋のものか、悪戯心か。」

「わからない。あたしは追いこまれたという感じだわ。」

「それはもう聞いた。君はわからないという。吉野はどうだったと思っているのか。」

「わからない。どっちとも取れたわ。」

「君は吉野をかばった。それは悪戯心でないことになりはしないか。愛情がそうさせた。僕に知られては大変だと思ったのなら、そういうことになりはしないか。」

「そういわれれば、そうかも知れない。」

「隠さなくてもいいのだ。真実をいわないと、僕に癪癪をおこさせるぞ。ここまで告白して、その小さな部分だけ隠すのはつまらないことだ。生涯の大事な問題をごまかしてはいけない。」

「ごまかしはしないわ。かばったのは、やっぱり愛していたからだと思うように

なったわ。」

「吉野の方はどうだったのだ？」

「わからない。正直に言ってわからないわ。」

「君の方に愛情があった。しかし、吉野の気持は正確につかみとれなかったというのだな。」

「そうね。」

「じゃ、大事なことをもう一度だけ訊く。吉野とからだの関係はなかったのだな。」

「なかったわ。絶対に。だから、癪にさわるのだわ。あたしをあんなふうに追い込んで、あなたをこんなに苦しめ、あたしが別れなければならぬ破目にした英吾が憎らしいわ。だから、あたし、もしあなたと別れたら、一度はほんとうに寝てよくならなければ、承知できないわ。でも、一度つきりだわ。つづける気持なんかないわ。」

「癪にさわるから寝て一度よくしてもらわなければ承知できないというのは、吉野に対する復讐のためか。」

「そうよ。復讐よ。復讐だわ。それでなければ、バランスが取れないわ。」

——突拍子モナイコトヲ口走ルノ昌江ノ常ダガ、コレハ僕ヲ驚カスニ十分デアッタ。シカシ、ソナナ欲求ガ昌江ノナカニヒソソデイナケレバ、コンナニ興奮シテ高言スルハズガナイ。復讐トイフ言葉ハ僕ガ意識的ニ投ゲタ鉤ダガ、昌江ハタワイモナク引ッカカッテ内心ノ欲求ヲ口走ッタモノト思フ。僕ノ投ゲタ鉤ハ期待シテイナカッタ魚ヲ釣リアゲタ。吉野ト寝テヨクシテモラワナケレババランスガ取レナイトイフノハ、復讐ノ相手ガチガウコトヲ、コノトキハ氣ヅカナカッタラシイ。ガ、サスガニ自分ノ論理ノ誤謬ヲ変ニカンジタノダロウ。三日後ニ昌江ハ訂正ヲ自発的ニオコナッタ。

「アレハ英チャンニ対スル復讐デハナクテ、アナタニ対スル復讐ダワ。アタシハ英チャンカラ何モシテモラワナイノニアナタカラ追イ出サレルノハ不合理ダカラ、追イ出サレルダケノコトヲシナケレバ氣ガスマナイ氣持ダッタト思ウワ。ソウデナケレバ損ダモノ。」

この修正を聞いたとき、内田の目を蔽っていた膜が消え去り、彼ははじめて手ごたえをかんじた。半月あまり右往左往した質問の核がここにあったことがわかった。昌江は気づいていないかも知れぬが、かの女の本心の核を探り当てた確信が生まれた。これで吉野への手紙が書けることになる。内田はつづけて訊いた。

「君は吉野にだまされたと思うか、それともだましたと思うか。決定的に一方か

らはいえまい。しかし、たがいにだましたとすれば、どっちに比重がかかると思うか。」

「わからないわ。でも、こんなに正直に何もかもしゃべって、やっぱり許してもらえないの？」

「許すかどうか、即答をもとめるのはおかしいと思わないか。しかし、保留という線まで折り合おう。僕は吉野に手紙を書く。返事を見てから君に答える。が、覚悟してもらいたい。一度や二度の手紙の往復で納得できる結論は出ないだろう。ひと月かかるか三月かかるか、半年かかるかも知れない。それからのことだ。」

「そんなに長いのか？」

怨めしそうな目を無視して、

「もうひとつ訊いておく。これは仮定の場合だから、答えたくなければ答えなくてもいいのだ。もし吉野が本気で君と結婚してくれと迫ったら、どうする？そういう場合がないとはかぎらない。僕の手紙を見た上でのことだが。」

「あたし、あのひとと結婚する気持なんか、はじめから全然ないわ。たとえあなたと別れていたって。」

「結婚はしないが、僕に対する復讐として、吉野と寝たわけか。」

「もう、そんなことは考えていない。あなたに対する復讐の気持だとわかってからは、そんな気持なくなったわ。」

「別れたあとのことを僕に約束しなくてもいい。僕には関係ないことだ。」

「どうしても別れなければならないの？ 厭、厭。許して。許してください。」

「許せ許せと君はいつているが、何を許せといつているのだ？」

「全部。全部よ。別れないで。」

「君は別れたあとのことを、いろいろと考えているじゃないか。別れる気がなければ、おかしいじゃないか。じゃ、訊くが、どうして別れたくないのだ？ 君だって大事な生涯を負目を背負って生きて行くより、新しい出発をした方がいいのではないか。」

「厭。あたし、あなたが好きなんだもの。別れるなんて厭。」

「好き、か。」

内田はたじろいだ。結婚以来はじめて聞く言葉だった。こういう直説法は内田の世界にはなかった。

「どうして、今さら好きになったりするのだろう？」

「今さらではないわ。前から好きなのよ。でも、こんどみたいに毎日気持の触れ

合う話をしていると、もっと好きになったわ。」

内田は溜息をついた。

×

吉野英吾君。

時侯の挨拶を省略して本題にはいる。五年前君と昌江とのあいだに起こったアフエア、去年の秋とことしの二月僕の不在の日のこと、その全部をデティルズにわたって知った。全部とはいえぬかも知れぬ。欠落があるかも知れぬ。

しかし、君の体液の量と僕のそれとの比較まで昌江が口にしたことを例とすれば、敢えて全部と考えてもよからう。僕は君がどういうつもりであったか、また、現在どういう心理であるかを知りたい。君の方から先きに昌江に向って奥さん好きだと言い出したのは、どの程度に本心だったのか。そして君は昌江に接吻を強要し、これを得た。強要とは昌江の説明だから君にも言い分はあろう。それを聞きたい。接吻の時期がすぎると、君は昌江にペッティングをほどこそうと企て、昌江の提案によって君へのペッティングで折り合った。それは二回くりかえされ、三回目のとき君は奥さんに誘惑されだまされたといった。

その言葉の意味するものを説明してもらいたい。どういう点でだまされたのか、具体的な説明を求める。その間約半年、君の僕に対する心情はどうあったか説明したまえ。以来五年間、君は僕を欺きつづけ恬然として僕と相対し、就職の世話をさせ、結婚披露宴において君に対する讃辞を与えせしめた。僕としては理解に苦しむ君の態度について説明を求める。

君は昌江に対し、誘惑されだまされたといったというのが、僕の見る昌江はさほどの能力の持主ではなく、昌江自身どうしてあんなことをするところまで追いつめられたのかわからぬといっている。また、僕の見る君の才気をもってすれば、逆に昌江を誘惑しだますことなど、小指一本の労にしか値しないと考えるが如何。この点、昌江が虚言を弄しているとしたなら、その点の説明を申し立てたまえ。僕の知りたいのは真実だ。君は昌江の翡翠の指環をはめた指を美しいと賞賛し、昌江は君とふたりきりで逢うときは必ずその指環をはめたという。この手紙を書きつつ、僕の目はその指環をはめた昌江の指が環をつくり、君の男根を握り摩擦している情景をうかべている。君はその指の環に君の体液の流れまつわるのちまで、美しいと断言する勇気があるか。

内田はここでペンを棄てた。書いているうちに不快な気持ちがつのって来て、こういう説明をする意味のなさを悟ったのである。説明は内田のすることではなく、吉野のなすべき義務であつた。ペンを棄てると、内田は彼の背後で、あるいは直面する笑顔の裏で舌を出している吉野の顔が目に見え来て、そのことが今までよりもさらにはげしい怒りと憎しみを駆り立てた。内田はまたペンを取り上げた。

五年前の君と昌江とのアフェア、去年の秋と今年の二月僕の不在の日のことを知った。

君の心事心情を訊く。

率直な返事を待つ。

これだけでいいのだ。航空便に託せば、幾日で届くか。吉野がもし率直な返事をすぐ書けば幾日で届くか。内田は自分をはげまし、大きく深呼吸をした。しかし、この手紙は幾日かポストに投げこまれなかった。内田は自分の逡巡の意味をつかみとることができず苦しんだ。彼としては理由がない筈である。この幾日の間は、内田を動揺させ、混乱させ、また沈潜させた。幾日かののち、胸にひらめくものがあつた。手紙を出す決意の生まれた理由は、憎むべきは憎み、怒るべきは怒り、そして、許すべきは許す勇気であつた。そして、また、彼は悟った。彼が求めているものは、昌江と吉野とのあいだのことに、卑しさの翳のないことであつた。そこに狡い卑しさがなければ、彼のけがれた量はかるくなるであろう。

どういふ返事が来るか予測は不可能だが、内田はそうあろうことを願い祈りながら、封書をポストにおとした。

(いまい たつお)

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成21年4月～平成21年9月) 総務担当

運営委員会

3月31日(火)

10名出席

平成21年4月例会 4月14日(火) 10時～11時30分 23名出席

議題1 会誌「鵠沼98号」配付について — 出席した会員には手渡し、
他は配付表に基づき担当者に依頼した。

議題2 「鵠沼ゆかりの文化人」の小冊子配付について — 同上

議題3 昨年度のプロジェクトの進捗状況について — 各チームより途中
状況の報告がされた。「鵠沼ゆかりの文化人」小冊子発行については本
日の配付をもって完了。

議題4 平成21年度の事業計画の事前提案 — 総会での展開に先立ち、
今年度の新たな事業計画案が事前に説明された。相模国準四国八十八か
所をテーマに全員参加の活動を行なう。具体的には、会員による八十八
か所巡り、公民館祭りの展示、記念100号会誌に結びつけていくことを、
追加の事業とすることが提案された。

お話 — 「鵠沼新道かいわいの変遷」「なつかしき学び舎その5 鵠南小学
校」について、鵠沼郷土資料展示室にて会員の説明を受けながら、見学
した。

運営委員会

4月28日(火)

11名出席

第23回総会・5月例会 5月12日(火) 10時～11時10分 23名出席

総会 — 中島会員の司会により内藤会長、松久鵠沼市民センター長の挨拶の
後、配付議案書の審議を行なった。「内藤千代子のコピー本はどこで借りられ
るのか、また早い時点で借りられるように願いたい。」との質問ならびに要望
が出された。コピー本の完成状況および完成後の展開方法の説明をし、回答と
した。それ以外は全会一致で承認され、閉会した。

引続き5月例会を行なった。

5月例会

議題1 6月例会（相模国準四国八十八か所鶴沼地区調査）の計画案内について — 概要が展開された。

議題2 その他 — 4月に入会された会員の紹介がされた。

運営委員会

5月26日（火）

9名出席

平成21年6月例会 6月9日（火）10時～16時20名出席同行17名

相模国準四国八十八か所鶴沼地区調査 — 鶴沼公民館に集合し、ルートの説明後出発した。渡部（瞭）会員の案内により全行程徒歩で調査。途中昼食をはさみ、最後の札所である普門寺で、住職（当会員）の法話を拝聴し、ご本尊も拝観させていただいた後解散した。

見学記については今号の本文を参照。

運営委員会

6月30日（火）

12名出席

平成21年7月例会 7月14日（火）10時～12時 22名出席

議題1 相模国準四国八十八か所について — 調査方法について説明がされた。四班に分けそれぞれの分担地域とグループリーダーおよび参加班員の一部が紹介され、更に参加されるかたの申し出を受けた。詳細は次回以降とした。

議題2 その他 — 退会者（一人）の報告があった。内藤千代子著作のコピー本の今後の動きについての経過説明がされた。

当会とは関係のない、東京にお住まいのご高齢の方および親族の方が、昔（戦前）住んでいた所を訪ねたいとのことで、ホームページを見て当会に連絡があったため協力した。当時の地理に詳しい当会々員の方々のご尽力で目的が達成できました。それに対し、丁重なお礼があったことが報告された。ホームページによる思わぬ効用でした。

お話 — TV東京「美の巨人たち」で5月9日オンエアされた「岸田劉生 麗子肖像（麗子五歳之像）」をDVDで鑑賞。その映像の中では岡田会員製作による再現模型により当時の劉生宅が紹介、最後の字幕には「鶴沼を語る会協力」の記載があった。

運営委員会

7月28日（火）

14名出席

平成21年8月例会 8月11日（火）10時～12時 16名出席

議題1 相模国準四国八十八か所について — 調査からまとめ迄の全体日程が日程表により展開された。更に、新たな参加者の追加募集が展開された。

議題2 その他 — 会誌99号の編集状況報告、今年の公民館まつりの当会の計画内容紹介、内藤千代子著作のコピー本について新たな動きの途中経過が報告がされた。新たに入会された会員の紹介および、挨拶があった。

お話 — 鶴沼郷土資料展示室で展示中の「鶴沼公民館開設50周年記念展」について、郷土資料室所属の当会会員の解説により見学した。教科書にも記載されるほど有名であった当公民館の誕生の歴史および、その後の時代とともに移る変遷が写真、資料等で知ることができ大変貴重な内容であった。

運営委員会

8月25日（火）

9名出席

平成21年9月例会 9月8日（火）10時～12時 24名出席

議題1 相模国準四国八十八か所について — 例会後各調査班毎にミーティングをもち具体的な展開および調整がされることとなった。現地調査活動は、早い班で次週からスタート予定。

議題2 その他 — 会誌99号の最終編集状況報告、新たな入会者（一人）の紹介および挨拶があった。

お話 — 「鶴沼の白い橋とは？」について — 映像も加えながら岡田会員に、お話していただいた。大正期に岸田劉生、裕伊之助、椿貞男、横堀角次郎らが好んで描いた「鶴沼の白い橋」について、何故有名になったか、それは何処にあったのかを、色々な資料・視点から地元ならではの考察内容は、身近な場所であるため大変興味深いお話であった。

内容については今号の本文を参照。

（文責 佐藤 弘）

編集後記

*春先、猛威をふるうと報道され全国的なマスク品切れを招いた新型の豚インフルエンザはこの秋から冬にかけて大流行のおそれ。対策には外出時にマスクを帰ったら嗽い手洗いをといわれています。はたして第2次マスクパニックは起こるのでしょうか。皆さまご用心を！

三声ほどして もう鳴かぬ 蟲もあり 立子

*内藤嗣喜会員の「東洋のマイアミビーチとして発展した湘南海岸公園の歩み」は江ノ電沿線新聞第402号平成21(2009)年4月1日発行におなじタイトルで執筆されたものを転載させて頂きました。藤沢市がマイアミビーチ市と姉妹都市提携するいきさつなど興味ある内容です。ところでマイアミ市とマイアミビーチ市とがあるなんてご存じでしたか。

*有田裕一、佐藤和子両会員の「村娘之図」(花持てる)は、村娘のモデルおマツさんがお元気のうちに記事にしておきたいと、ご多忙にもかかわらず、執筆してくださいました。無論、本号をおマツさんに献呈することを前提として。

*小池清志会員には今年度の活動テーマ「相模国準四国八十八ヶ所について」の行事の一環として6月例会のあと鶴沼地区内にある札所を廻ったことを書いて頂き「史跡めぐり」として扱いました。

小池会員は八十八ヶ所全調査のAグループリーダーとして活躍して下さいます。

*自分で言うのもなんですが9月例会のお話「大正期に岸田劉生、碓伊之助、椿貞雄、横堀角次郎らが好んで描いた『鶴沼の白い橋』とは」を記事にまとめました。画家のモチーフの場所の特定はゴッホやユトリロなどヨーロッパでは研究が進んでいますが、日本では街並みの変化が激しくてなかなか特定できません。しかし、いろいろな資料が出てくるものです。

*投稿第2回目、エッセー「くげぬま断章」(Ⅱ)を下さった山上英男氏は、今年度から当会会員になりました。夏の話題だからと芥川龍之介の「鶴沼雑記」から書き起こし「河童」から河童忌に話題を転じ河童の絵談義におわる、秀逸のエッセイです。

*今井達夫遺稿。今号は、小説「指の輪」を選びました。カタカナ文を挿入する手法は谷崎に触発されたのかも知れません。原稿用紙95枚はこの作家にとっては長編の部類に入るでしょうか。(岡田)

『鵠沼』 第99号
平成21年9月30日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2002

URL=<http://kugenuma.sakura.ne.jp/>